

夜遊びするならラスベガス

藤永 潤 著

－出発ドタバタ劇－

毎年恒例のわが家の行事となってしまった（いつまで、続くやら）海外旅行ではあるが、今回は、場合によってはじゃじゃ馬億万長者にもなりかねないというラスベガスへの旅行となった。

ラスベガスといえば、思いつくのが、カジノ（トバク、バクチ、ギャンブル）である。そんな大きな金が動き回る都市へと向かうのであるが、スタートからドタバタ状態となってしまったのだ。というのも、出発に先立って、J Rへ乗るため（今回の経路…旭川駅→J R→新千歳空港→成田空港→サンフランシスコ→ラスベガス到着）旭川駅へ向かったのだが（義父の車で）途中でわたしの上着を家に忘れてきたのに気が付き、戻ったのだ。戻るとJ Rに乗り遅れる可能性もあったのだが、とにかく戻り、タイヤをキキキーと鳴らしながら走りまくった。結局、なんとか滑り込みでJ Rに乗ったのである。（駆け込み乗車は、ご遠慮ください）やがて、駅長の合図とともに、七時三〇分発のJ Rは出発したのである。もし上着のためにJ Rに乗り損ねたら大笑い涙物語である。それは、ウルトラアメリカ横断クイ

ズの最初のイエス・ノー段階で、もう跳ねられたと同じであるが、第一関門はパスである。

それにしても、今回はとにかくスタートがダメなのである。スタートがダメなら後が良いかもしれないのであるが？
この辺はミステリーである。

アメリカ（サンフランシスコ）へ向かう航空会社は、ユナイテッド・エアラインで、本当はデザインの面（カラーリングおよび制服等の格好の良さ）から、ノースウエストに乗ってみたかったのであるが、そうもいかなかったのである。しかし今回の旅は、沢山のハプニング続きで、出発前の成田では、ツアーの係りの人から帰りの飛行機がロス経由に（本当はサンフランシスコ経由）変更になったとの知らせがあり、他にも沢山のツアー客がいるのにどうして、わたしたちだけが、このような目に会うのだろうと思った。

それに、アメリカ内の国内線も、ユナイテッド（ノースウエストとどころではない）と騒いでいたのに、ただHPと記入されている航空券を渡されたただけだった。いよいよ不安になり係りの人に何という航空会社か調べさせた。するとアメリカンウエストとのことである。まあ、いずれにしても国内線で知っているのは、TWAぐらいだから、他の会社は知らなかったのも、有名会社以外（わたしの記憶の中の有名会社、本当は有名なのかも知れないのだが…？）は、どこでも同じである。成田での待ち時間は、これでもかという程に時間が余った。レストラン街では、『ワーズワースの冒険』というテレビ番組に出演しているヒゲもじゃの秋山さん（名前を間違えているかも知れない）という人を見かけて、テレビ通りに背の低い人だと思った。一緒に歩いている人は、マネージャーに違いないというと、妻

があれば、子供だということで、もう一度見ると確かに秋山さんの子供だった様である。

そうこうしているうちに時間も迫り機内に乗り込んだ。とにかくこの日は空港が混んでいるらしく出発が遅れた。しかも、雨と雷が凄く、離陸してもピカピカおよび機体がグワングワンと揺れまくりで、不安になっている乗客も多く、「ウワー」とか「キャー」の類の声があちらこちらから飛び交ってきた。飛ぶのは飛行機だけで充分である。雨・風・雷を抜けると、安定した飛行に移り、飲物が配られた。わたしたちは（わたしと妻）、赤と白のワイン頼んだ。飲物の種類は、他の航空会社に比べると少なかった。本当はチェリー酒が飲みたかったのだが…。

ー機内からラスベガスへー

こんな中、落ち着き始めた機内で、スクリーンに写し出されるTVを見ようとヘッドホンをつけてチャンネルを合わせようとするのだが、映像と声がなかなか合わずイライラしていたのである。一瞬、これかなと思う所で、妻にこれじゃないかと知らせた。その時、通路を挟んで隣の眼鏡をかけた女性が話しかけてきた。同じ東洋系の顔だったのだが、実は中国人だった。彼女は英語で話しかけてきたのでまだよかったが、中国語だったらアウトだった。それで、TVのチャンネルの番号を教えてくださいというので、今合っているチャンネルを教えた。しかし、これはどうも違っていたようなので、すぐに訂正した。新たにチャンネルを教えるが、これも間違い。お互いに笑い、仕方なく乗務員（ア

メリカの航空会社は、スチュワーデスというより男が多いのだ）に尋ねるとチャンネル1であることが判明した。これを知らせて万事OKということになるのだが、ここでチャンネルを捜せなかった理由が良く分かった。それは、音が低くて、ボリュームを上げると、ものすごいザザーというノイズが絡んで聞こえないので、結局TVはあきらめた。まあいずれにしても、スクリーンも壁の一番前に座っていたために見上げる形となり、見ずらく、諦めざるをえなかったのであるが、中国人女性も呆れた表情で笑っていた。

やがて、空港で喰ったばかりなのに、なぜか腹が減ったわたしの前に機内食が現れたが今回の機内食は、今までの中では良いものとは言えなかった。わたしは、ビーフ串焼きで妻はチキンと注文した。とにかくこういう時は喰うのが一番とビーフに食らいついたのだ。

さて、アメリカのような時差の大きいところへ行くときは、機内でおだたないで、静かにし、睡眠を充分取ることが大事だ。これに逆らうと時差ボケという現象に見舞われるのだ。だから、頑張って寝ようと努めたのであったが、あの狭い体勢では、全然眠れなかったのである。ひたすら目を閉じているだけで、サンフランシスコに着いてしまった。

飛行機から降りるとき、中国人女性は、グッドラック！と言って去って行ったのだが、本当にそうありがたいものだった。彼女は、ツアーでボストンまで行くようだった。

さて、やはりスタートでケチが付いたように、それが尾を引いてしまったのである。それは、サンフランシスコで

はラスベガスへ行くために国内線へ乗り継がなくてはならないのだが、荷物の出て来るのが遅いのと、トロトロ税関のために、時間に余裕があったはずにも関わらずに、ついに飛行機に乗り遅れてしまったのである。サンフランシスコ空港はひどい所（いや、こんなことへのさらなる時間の余裕計算が出来ていなかった旅行社が一番悪いのだ）と思ったが、次の便のチケットに交換してもらった。これが、まだ国内線だからいいけど、国際線だったらえらいこっちゃ。しかし、それにしても外国人用の窓口が混んでいるのが分かっているんだから、アメリカ人用の窓口に回してくれればよさそうなものであるが、頑としてダメなのである。香港では、そういうふうしてくれたのを思いだした。まったく酷いものである。結局、ラスベガスの旅行社にも電話を入れて、事情を説明しておいたのだが、予定はどんどんと狂っていった。だいたい最初の予定では、サンフランシスコ空港でも、現地係員が乗継ぎ手続きをしてくれることになっていたのだが、誰も来ていないのだ。航空会社の説明によると、かなりの人数が乗継ぎに失敗したということだった。

なお、このチケットの変更をするときも長蛇の列となって、次の便まで間に合わないのではという程、時間が掛かってしまったのだ。まったく、イライラは募る一方だった。添乗員付のツアーだったら、不安も半減していただろうが格安ツアーだから仕方がないのだ。そんなこともあって、完全に疲れきって足を引きずりながら国内線のゲートへ向かったが、これまた結構な距離で、案内書には一〇分程歩くとなっていたが、広いの遠いのである。やっとの思いで何とかゲートまでたどり着いた。そこでは、空席取ったので、妻とはバラバラの席だったが、受け付けで隣合わせ

になるように手配してもらったので、小さい飛行機ではあるが、これでやっとラスベガスへ行くことが出来ると安心したのである。ここからは、一時間少々で着くのだ。

わたしたちは疲れきった顔で、サンフランシスコ空港で買った旨いと噂されていたパンを大事そうにしっかりと抱えてラスベガスへ向けて飛行機は飛び立った。

ラスベガスへ向かう途中機内から見た光景では、岩だらけの山と広大な砂漠状のものが見られ、テレビで見た月面を連想させる地形が続いたのである。途中で極度に岩肌の起伏したところがあったので、あれは、グランドキャニオンかと隣の人に聞いたが違うと答えが返ってきた。グランドキャニオンは、翌日に軽飛行機で行くことになっていた。ラスベガスは、砂漠の真ん中にポツンとあるが、やがてその姿が見えてきた。近づくに連れて、ピラミッド形のルクソールホテルが目立って、視野に飛び込んで来た。ただし、わたしたちの泊まるホテルではないのだが。

空港は砂漠らしく砂の中に滑走路があった。ぱっと見では、まるで砂の中に着陸するようでもあった。ガサッ！という鈍い音で飛行機は摂氏四〇度の灼熱の地に降りたのである。

－MGMグランドホテル－

空港では、現地の係員が待ちかまえていて、ホテルへ向かうのだ。しかし、再び驚かされたことに、空港内ではいきなりスロットマシンがしっかりと、疲れ果てたわたしたちを出迎えてくれて、カタカタと回転するスロットが目に入った。空港を出ると、さっそく熱気が襲ってきたのである。ここでツアーに参加した他のメンバーと合流し、ツアー専用バスヘトランクをぶち込んだ。バスはルクソールという、大きなピラミッドとスフィンクス像のホテル…ここで断わっておくが、ピラミッドというのは飾りではなく、たぶん実物大の大きさの列記とした、ホテルの建物なのである。この傾斜した壁面がホテルの部屋になっていて、ピラミッドは、真っ黒い色のガラスで覆われている。その頂上の部分が透明なガラスとなっていて、夜になるとものすごい光量の光を放つのである。

そうして、この周りを見せびらかされるかのようにして、グルリと回り込み、先ずはエクスカリバーというホテルへ向かうのである。このツアーは、好きなホテルを選択することができるので、色々なホテルにツアー客は分散するのである。このエクスカリバーは、お城になっていて、室内はルネッサンスの雰囲気を出しているらしい。ここで、数名の客を降ろして、次はいよいよ、わたしたちが泊まるMGMグランドホテルである。このMGMグランドホテルは世界最大規模（客室5005室、従業員数8000人）のホテルであり、エレベーターだけでも94台も付いているのだ。シンボルとしては、正面に大きなライオンがモチーフされている。これは、あのMGM映画のガオー！と吠え

る、ライオンをイメージしたもので、全体は金色で、目はエメラルド色をしている。巨大な入口を通過するとロビーに通じて、(ライオンの反対側から入ったのだ) ここでもやはりカジノになっていて、スロットマシンが大当りは今かと、あちらこちらで回っているのがあった。このカジノは(MGMだけで…)フットボール場が四つ入る広さなのだ。スロットマシンだけで、3500台以上ある。こんなところで、道に迷ったら大変である。チェックインすると、このホテル内の地図が配られが、頼りはこれしかないのだ。カジノの中を抜けて行くと、メインエレベータータワーに着き、ここでも階毎にエレベーターの乗り場が違うのである。わたしたちは、二〇階に泊まる事になったので二〇階行きのエレベーター乗り込んだ。客室は、オズの魔法使い、ハリウッド、南部、カサブランカをテーマにしたブロックに分かれているが、わたしたちの泊まった部屋は、オズ仕立てだった。ここに着いて、やっとホッとしたのである。あまりにもハプニング続きで無事に着けたというところからだろう。

しかし、客室へ向かう廊下では、尚も驚かされた。(はっきり言って、驚いてばかりである) というのも、廊下がものすごく長くて、どこまでも客室が続いているのである。まるで鏡を二枚合わせて、果てしなく続く廊下のようなものである。どこまで、歩くのかと思った三分の一の所で、わたしたちの泊まる部屋が見つかった。一番奥の客室に当たった客は、随分と良い運動となることだろう。

さて、実際に部屋に入り、窓からの眺めは広大な陸地と岩山が目立ち、さすが、ラスベガスといった感じだ。しかし、ここではのんびりともしてられないのだ。もう一度翌日の集合場所の確認とカジノ内の案内を兼ねて、トラン

クを置くとすぐに、エレベーターで一階に戻らなくてはならなかった。エレベーターの中には、陽気なアメリカ人が乗っていて、

「日本から来たのか？…ここは、楽しいところだから、充分に遊んでいくといいよ…じゃあ！」と笑いながら去って行った。

下で待っていたガイドによって、集合場所へと案内されたがとにかく広い。迷子になっても不思議はないのである。アドバイスとして、時差ボケを緩和するために朝昼は寝て夕方から夜中にかけて行動すると良いと言われた。なにせここは、二四時間全く眠らない町で、店屋もカジノもバスも人通りもすべて昼も夜中も変わりなく、動いているのだ。第一夜中の二時三時に、赤ちゃんを乗せた乳母車を押した人がしょっちゅう中往来するのだから…。

ガイドや他のツアー客と別れたわたしたちは、夕食をホテル内にあるビュッフェで取ることにした。ビュッフェの横では、天井が大きなドーム状となり、森があり、その中にはオズの登場人物たちが、あちこちにいるのだ。しかも、ドーム型の天井では、もの凄い音響で稲光がなったり。雨が降ったり風が吹いたりを繰り返している。まったく、大掛かりな仕掛けだ。さて、ビュッフェであるが、バイキングスタイルとなっていて、いろいろな料理が置いてある。他にも九つ程のレストランがホテル内にはあるのだが、手っとり早いところここにした。わたしは、すかさず肉・肉・肉・たまに野菜…そして、ソーセージ（やはり肉か？）をこんもりと皿の上に乗せて、テーブルへと向かった。なんだか腹が減っているせいかかぶりついた。他のテーブルでは、数人のグループの陽気なアメリカ野郎が、食事を前に

して大きな声で笑っていた。良く外国へ行くと日本食が喰いたくなると聞くと、わたしは、何でもよく食べるので、とにかくそんな事を思ったこと一度もなかった。もっとも、一カ月や一年と長期滞在すれば話は別だが…。

それにしても、こちらの人々は良く食べるようだ。しかし、わたしといえどもさすがにあのケーキ類の甘さは強烈で、ちょっと遠慮してしまう程である。現地の人、そんなものを平気で二～三個食べてしまうのだから恐れ入る。

まあとにかく、この日は十時間以上も飛行機に揺られたので、明日に備えて（朝四時に起きなければならない）早めに寝ることにした。しかしながらビュッフェから部屋へ戻る途中に、ついにスロットマシーンをやってしまったのである。普段は全くギャンブルをしないわたしも、スロットマシーンをやってみると結構面白いと感じた。特に、現金がジャラジャラと出てくる様子は、日本のパチンコやパチスロとは、かなり違う雰囲気だ。これだったら、会社のギャンブル好きが来たら、どれだけ泣いて喜ぶか計り知れないと思った。現に日本や各国あるいは他の州から訪れたものが、どっぷりとカジノにはまってしまって、戻らなくなるケースも結構あるようだ。

ーグランドキャニオンへー

翌朝、ねむい目を擦りながら、グランドキャニオン・ツアーに参加するための集合場所へ向かった。グランドキャニオンへは、セスナで向かうのだが、セスナに乗るのは、初めてのことで、全員荷物と共に体重計に乗せられ完全に、荷物一体型人間へと変身するのである。これは、機体のバランスを考えて重たい人、軽い人の重量配分をする訳で、

そのため妻とは隣合わせの席にならなかったのである。前の方の席には、かなり太った（わたしも太っているが、その比ではない）外人二名が、ドスン！と座り（後で分かったが、この二名はドイツ人だった）わたしは、後ろの方へ座らされたのである。

ツアー参加者は、数機のセスナに小分けソバの様に分けられて乗るのだ。わたしたちのパイロットは、中でも一番厳しい表情の持ち主だった。少し日に焼けて、赤い鼻なのだ。

乗り込んだセスナには、ヘッドホンが用意されていて、日本語、英語、ドイツ語がチャンネルの切り替えで出来、案内が流れてくる仕掛けになっていた。妻の横には、ツアーガイドの日本人らしき女性が座り、この人がすこぶる明るく元気がよいのである。

やがて、クロロ、クロロ、ブロロローン！というエンジン音とともに、滑走路へ向かうのであるが、ヘッドホンから流れて来る案内の音楽は、なぜがオリンピックのテーマ・ミュージック（曲名は忘れたが…）なのだ。セスナの内装は、古い車の様にも見え、昔乗っていたオンボロワーゲンを連想してしまった。どうも軽飛行機に乗っているというイメージではなかったが、パイロットが、アー！とか何とか叫んだと思った瞬間に、スロットルを全開にしてテイクオフしたときは、「浮き上がった。これは、まさしく飛行機に違いない」と感じた。このフライトは、早朝で集合が五時五〇分だったから、フライトしたのは、六時を過ぎていたと思う。

セスナということで、室内にトイレは無いので、行く前にほとんどの人がトイレへ行った。舞い上がった小型の飛

行機にも関わらず、フライトは結構安定したものだった。（と、思っているのも今のうちじゃ）段々と小さくなっていく家々は、マッチ箱サイズと化していき、川や湖が見えてきた。（こ、こんな砂漠に？）

しかし、実際のグランドキャニオンが見えはじめた辺りから、気流の関係でグラグラと揺れ始めたのだ。（そーら、きたぞー）わたしは、飛び物好きなので、平気だったが、隣に座っていた女性は気分を悪くして、ついには吐いたようだった。

妻も平気であったが、不思議な事にわたしの運転する車では、良く気分を悪くするのである。一体どういうことなのだろう。

グランドキャニオンの上空には、沢山のセスナやヘリコプターが飛び交っていて、わたしたちの右横を飛んでいた同じツアーのセスナは、岩肌ギリギリを飛んでいるので、ぶつかりはしないかと思う程であった。

景色を眺めると、あの岩山のあちこちに、ちゃんとした道が（といってもアスファルトではない）通っていて、しかも、鉄道まで走っているというのだ。今回のフライトは一時間ちょっとだが、車で走ればラスベガスから六時間にかかるそうである。前に座っていたBIGサイズも、ひたすらVTRやカメラでパチパチと撮りまくっていたようであるが、気分を悪くした女性は、青い顔をして、まだ地上に降りられないのかという表情をしていた。

下に見える岩肌の上には、小さな草状のものが見えるのだが、説明によるとそれらは松らしかった。高い所から見ているので、草にしかみえないのだ。

セスナはやがて岩山…といっても、広大な広場にある飛行場に降りたのである。わたしは、グランドキャニオンをセスナで飛ぶというから、あの岩の裂け目に急降下で突入して、「6 3 3 爆撃隊」のように、グワワワーンという音を立てて、スリリングなことでもしてくれるのかと思ったが、フワリフワリと飛行場へ向い、無事にダツッ！という音とともに、着陸したのである。

そういえば、先ほどのガイドであるが、ラスベガスへは一年半前に来たというが、前からアメリカに居たのだろうか。そんなことが気にかかりながらも、タラップを降りた。

さて、次に待ち受けていたのは、極度に陽気なカウボーイ野郎で、こいつがどうやらバスの運転手らしかった。どうもそのカウボーイ姿というのは、制服のようで、他のバスドライバーも同じ服を纏っているのである。乗り込むバスは大きなバスなのだが、ミッションがオートマチックなのである。こんなに大きいのにと思いしや、考えてみたら自分の取得した大型特殊のミッションもオートマだったということを思いだした。ははは…

元気の良いガイドと、陽気なカウボーイの運転するドタバタ観光は、一路朝食を取るためレストランへ向かうのであった。カウボーイ野郎は行く途中に沢山のジョークを飛ばし、みんなに、ここではカウボーイの声の真似をしなければならないと要求し、まずは自ら、

「イーヤッハー！」

と叫んでみるのだ。次には、みんなの方にマイクを向けて、

「1・2・3…イーヤッハー！」

と叫びの返って来るのを待つのだ。このバスにはアメリカ人も沢山乗っているので陽気な、アメリカ人たちは、やはり

「イーヤッハー！」

とご希望通りに声を上げるのだ。カナダへ行ったときもそうだったが、外国では、バスドライバーが、ガイドを兼任するケースが常識なのかもしれない。

やがて、朝食バイキングに到着し、たっぷりと浴びるほどに食事をする訳だが（別にそんなに喰わなくてもいいのだが）満腹状態の腹に、さらにここでも超激甘ケーキ類が登場するのである。しかし、このときはケーキできなくドーナツであったが…。一口食べてみるとやはり、異常な甘さで、逆に

「イーヤッハー！」

と言ってやりたい程であった。しかし、満腹感という満足度の下で、バスは空からとはひと味違ったグランドキャニオンを見ることになるのだ。はっきりいって上空からでは、途中で同じ景色が続くので飽きてしまうのである。そういえばガイドの説明によると、四年程前に日本人女性が誤って転落死したことがあるらしい。くれぐれも、写真撮影の時に足元だけは注意してくれとのことだった。

確かに展望台に到着し、上からのぞき込むと、こ・これは？という凄い眺めであった。この状態をすかさずカウボーイ野郎が疑似口音響で真似をして（落下音）笑わせるのである。こんな岩山で驚かされるのが、動物たちが生息しているということで、リスがチョロチョロと歩き回っているのである。しかも、このリスたちは、人間慣れしていて逃げようとはしないのである。それどころか餌を要求しているではないか。ところが、至るところに餌を与えないで下さいという縦看板があり、ガイドの説明でも餌をやることは法律で硬く禁止されているといわれていたので、あげる訳にはいかなかった。といっても、餌すら持っていなかったのであるが…。しかも、リスなどの動物は時折狂犬病を持っている場合があるというのだ。（何でリスなのに狂犬病なんだ）

日本だったら、浅草のハトなんかが、餌くれ体勢で頭の上やら手、肩、腰ととまってくるぐらいだ。

みやげ物屋に入ると、そこにはカメラマンのための本まで売っていたのでドブプリとつかるプロカメラマンも多いのかもしれない。やはり、グランドキャニオンは地上からの眺めの方が迫力があって好きだ。

グランドキャニオンはかなり高いところにあるので、説明によれば水を持って来ることが大変らしく、水が高価なのだそう。だから、ここら辺の人は、二日一度しかトイレへ行かないと再びカウボーイ野郎がジョークを飛ばした。そんな水不足の展望台で食べたアイスクリームは、日本ではこんなサイズを出したら赤字だと思われるほどにBIGサイズで、日本のコーンアイスの三倍はあった。逆にアメリカ人が日本に来て、アイス注文したら。一体こりゃ何じゃ！ということになるのかもしれない。丁度巨人の国と小人の国の違いのようなものだ。

わたしの場合、標準大和サイズに慣れているものだから、残念ながら途中で飽きてきてしまったが、あの灼熱の太陽の元では、味よりも冷たさが勝ったようである。

さて、ここでは、時間に正確な日本人というレッテルを貼られてしまったようなのだが、(バスの集合時間に必ず戻って来るということで) それもここまでとなってしまった。というのも、必ず現れる大人の迷子というやつで、予定の時間を過ぎてても、戻らない一人の女性がいたのである。

もう一人の女性が捜し行くといってバスを降りた。戻ってきしてみると、結構年輩の女性で戻り方が分からなくなったというのである。本当に困ったものだ。セスナのフライトの時間もあるから大変だった。毎回どの旅行に参加しても、このような人がいるから不思議である。逆に自分がそうならないように気をつけたいものである。絶壁からの見学も終えて、ラスベガスへの帰路へと向かう。セスナ上は行きのフライトとはうって変わり、天候が乱れて丁度雲の下を通って行くことになるのだ。行きの時に調子の悪くなった女性にとっては、最悪の日となるだろう。やがて、ブロロローンというエンジン音とともに、雲の下までたどり着きほらほら来るぞー！と思った瞬間からユレユレの極地となった。さすがに、気分を悪くしていた女性も、ずっと眠って行くって言っていたにも関わらず、そのユレユレ攻撃にはかなわなかったようで、顔色が青味を増してきたのである。気の毒に！…そして、やはり吐いた様だった。ひと事ながら早く、空港に着かないかと思った。

グランドキャニオン・ツアーを終えたのは、丁度昼で、そこからは、もうツアー客とは離れて、すべて自由行動と

なっていた。

ここで、オプション・ツアーと呼ばれる、別注文のツアーも用意されていたが、旅行代理店のものは、途中でびん跳ねされて三倍以上の高値となるので、今回も自分たちで直接申し込んだのである。申し込んだのは、ナイトショーとヘリコプターツアーだが、これは後ほど詳しく説明するとして、グランドキャニオン後の空き時間は、MGMグランドの周辺の探索である。

ーカジノ・カジノ・カジノー

MGMは、世界最大のホテルだけあって、やはり広い。特にラスベガスに来てから痛感させられるのが、どこへ行ってもカジノだらけということで、空港を降りたらカジノ、ホテルに入ったらカジノ、先ずカジノ、通路の脇にはカジノ、カジノ、カジノ、カジノ、カジノでもうひとつおまけにカジノである。昔、ダウンタウン・ブギウギ・バンドのモーキンブギなんてのがあったけれど、カジノブギでも作った方がよさそうである。

これは、日本で考えれば、空港内やらレストランや至るところにパチンコ屋があるのと考えれば良い。しかし、パチンコ屋と大きく違うのは、その場で、現金がドンスカと（出ればの話だが）と出てくるということで、ボールペンやハンカチを持って換金等に行かなくても良いということだろう。さらに、出てくる金額が大きいということだ。大

きい金額には億なんてのもあるが、五〇万円程度ならあちらこちらで出ている。

さらに、バーのテーブルの上では、キノ（KINO）と呼ばれる番号合わせトバクは、レストランの中に居ても、いつでも表示板にて見ることができるのだ。きっと彼らの頭の中には、（ここで、但し書きをしておくが、彼らと差すのは、あくまでもギャンブル好きの人のことをいう）ギャンブルの事しかないに違いない。それにしても、アメリカは何処へ行っても陽気な人が多いのだ。中には、極悪人もいるのだろうが、その辺を歩いているほとんどの人が、顔を合わす度に、笑顔で応えてくせれる。（日本でこんなことしたら危険な人と思われるが…）それに対して、日本や中国等の東洋系では、無表情というのが多い。よく聞く事に西洋人はオーバーアクションと言うけれども、決してそんな事はないと思う。

さてさて、MGM…大きなゴールドのライオンの顔（彼はスマイリーではなかったが）の下から出て、いろいろな他のホテルに行ってみようではないか。

まずは、MGMの斜め向かいにある城をモチーフにしたエクスカリバーホテル。ここは、特に空にくっきりと目立つ存在でホテルの中央部分が、城…というよりは、キャッスルといった方が雰囲気は湧くかも知れない。そのキャッスルは、かなり電気料金がかかりそうな程明るく、光々と照らされていて、ホテル正面から動く歩道に乗って入っていくのである。そうそう、説明が遅れたが、MGMとエクスカリバー、さらにトロピカーナというホテルのある十字

路にはスカイウェイ（いわゆる歩道橋）がかけられていて、垂直に上がるためのエレベーターまでもある。とにかく、こちらでは身障者の権利がとことん主張されているのだ。さらに、日本では（わたしの住む北海道では）考えられないことで、露天にエスカレーターが、かかっているのだ。ということは、雨のことは全く考えていなく…それとも完全防水なのか？さてや、雨が降ると突然どこからともなく屋根が現れるのか？しかし、どう考えてみても、むき出し状態のエスカレーターであった。

やはり、ラスベガスは、もともと砂漠のど真ん中に造られた街なので、ほとんど雨というものが降らないのだろう。その証が、こんな形となっているのだ。わたしたちが滞在中に雨らしきものが一度だけあった。それも雨というより、噴水の水か何かが上からパラリパラパラと降ってきただけなのである。しかも、数分間だけである。ああ、これが雨だったのかなあ、と思うのであった。だいたい、空は晴れていて、少々の雲があるだけだったから、あの雲が降らせたなと分かるぐらいだった。

雨らしきものも止んで、数歩歩き始める。気温が四〇度の状態だから歩く人々は、手に手にビール、コーラの類を抱えて飲みながら歩いている。しかも中には、コーラ等のリットルポリビンを持ち歩いている人もいるのだ。これはもう暑いというよりは焼かれているという状態だ。だからわたしたちは、昼間はあまり行動せずに、夕方から夜中にかけて行動する逆人間型の行動に走ったのだ。このことは、旅行社の人のアドバイスにもよるもので、時差ボケ対策にもなる。ラスベガスという所は、二十四時間本当に眠らない所で、夜中の一時や二時でも平気で赤ちゃんを抱えて

歩いている人がいたりする。さらにそんな時間にも関わらず、縁日の人混みをひっくり返したように、ゴチャゴチャと人の流れがあるのだ。だから町全体が不良少年少女大人子供なのだ。特に週末になると、この流れは極度に増し、夜中の三時であろうが四時であろうが、人が途絶えることなんてありやしないのである。二十四時間、店なども全て営業しているのだ。そうして、ひっきりなしに、あちこちからジャンジャンフォンフォンとスロットマシーン等の音が聞こえてくる。

話しは元に戻ってエクスカリバーの中に、吸い込まれたわたしたちは、ここでもやはり、入ってすぐにカジノに出くわすことになる。いったいこの町はどれだけの金が動き回っているのだろうか。そう思いつつも、エクスカリバーを後にして、次のホテル…言っておくが、ラスベガスはホテルがメインの町で、ホテルの隣はホテルといったケースが主流だ。しかも、このホテルというのが、必ず何らかのショーやイベントをやって客を飽きさせない配慮がなされているのだ。

次の目的のホテルはルクソールと呼ばれるホテルで、外観からはこれがどうしてホテルなんだろうと思われるような建物なのだ。どういった外観をしているかというと、それはエジプトそのもので、メインのお飾りはスフィンクス像で、多分実物大のものであろう。(但し、スフィンクスの実物を見たことがないので、確かではない)

さらに、背後に控える黒い大きなピラミッドの壁面は客室で、このピラミッドに入っていくと、呪いがかかり…いや、中は空洞になっている。そうして、入り口にはエジプトの壁画があり、イカニモといった感じを出しているのだ。

建物の中では、思わず口を開けっ放しの状態で、首を九〇度上へ向けてしまい、上空…いや、天井には壁面にへばりつくようにして、客室が見えるのだ。この客室の前には階毎に廊下が張り巡らされていて、豆粒のように見える人が上から覗いている。もちろん、下からもわたしたちが覗いているわけだ。最下階には運河が巡らされていて、その中でエジプト運河一周などと船で巡ることもできる。日本の豪華ホテルだったら、せいぜい、中庭の池に錦鯉などが放されている程度だろう。（まあ、それはそれでまた違った良さがあるのだが）

その運河を越えるとすぐに、電動仕掛の喋るラクダが出迎えてくれて、人々は写真なんかを撮ったりしている。中央を見上げれば、大きな岩がありそこへもエスカレーターが取り付けて合って、かなり立体的な情景なのである。いったい、ここはどこなんだろうと錯覚してしまう程だ。

ゆっくりと、エスカレーターに揺られて上に上がって行くと、中心部となるところには小高い建物が数個、幻想的に立ち並んでいる。ここは、後日改めて伺うことにして、とりあえずMGMに戻ることにした。本当は、このホテルに泊まりたかったのだが、いつも予約で満室だそうだ。丁度、ホテル街の一番外れに位置するのがこのルクソールだ。ラスベガスはメインストリートを中心に一列にずらりと並んでいるので大変分かりやすい。

それにしても、どこのホテルを見てもイルミネーションは凄い。よくまあ、発電所が保つものだ。ここには、フーバーダムなどの巨大ダムがあるから、それがこのキラキラした街の、この輝きを支えているのだろう。

それにしても、時間の感覚がまったく変なのである。これは、時差ボケとはまた違ったものかもしれない。鶏は一

日中電気をつけられて、卵を生み続けるがそれと似たようなことかもしれない。

二箇所程のホテルを回ってきただけなのだから、結構規模が大きすぎて足腰も疲れ、腹もすいてきたので、夕食をとらなくてはとMGMのレストラン街へ足を運ぶ。しかし、やはりここでもだだっ広いカジノの中を抜けて行かなくてはならないのである。カジノの中では、あちこちで大声があがり「キャー」とか「ウオー！」の類の歓声とともに、嬉しそうな笑顔が見え隠れする。きっと、大きく当てたんだろなあ、大概そういう声の方には、一瞬みんな振り返るのである。

長い長いカジノを抜けると、そこはレストラン街だった。この先には、明日行くことになっているMGMアドベンチャーがあるのだ。その行き場所だけを確認しておいて、レストラン街へ向かった。

しかし、ここでレストラン街といってもほとんどのレストランでは予約が必要なのである。そこで、予約の必要ないファースト・フードの店で食べることにしたのだ。ここは、マクドナルド、ピザ、中華、日本食などがある。とりあえずピザを喰うことにしたのだが、目の前にある旨そうなピザを目の辺りにして、四切れ注文した。四切れといっても半端じゃない、タイプはパンタイプとニューヨークスタイルがあり、半々注文した。半端じゃないと言ったが、男どもは大概、一人一切れを注文していたが、わたしたちは食欲に負けてしまったのである。…というよりは、注文しているときは、食べきれるかどうかなんてことは考えていなかった。ピザのサイズは半径二〇ファーストフード、パンタイプの方は厚みがあるため、ボリュームもかなりだ。ここで、飲物もビッグサイズで、カップの高さが三〇セ

ンチはあるようだ。これらに、食らいつくと（味はなかなか旨い）途中まで勢いでいくが、最後までは食べきれずに少々残してしまった。日本のピザで考えると四切れを二人で食べるとあっという間だと思うのだが。ここで、人にばれないように小さくゲップをして、満腹山大国の御一行さまは、レストラン街を去って行くわけである。

と、普通なら部屋に戻って、ボタンキューとなるわけだが、途中にはオイデオイデしているカジノが待ち受けている。またもや、吸い込まれるようにカジノへ入って行き、いつの間にか1ドル紙幣が、スロットマシーンに吸い込まれていくのだ。スロットマシーンは、5セントの台から始まって25セント、1ドル、とさまざまなレートの台があるわけで、1ドルの台などは、当たると最高額が億金になるらしい、それは、客がつぎ込んだ額が常に表示されていて、どんどん累積していくのである。大当りのときは、その累積額が一気に出て来るという仕組みだ。こいつを、みんな狙っているようだ。初日は、何も知らずにわたしは25セント台をやっていた。日本円にすると一振り（おっと！一振りはツボか？）25円ということになる。しかし、大概是三枚まで、コインを入れることができるのであるが、少し稼いで来たときは三枚つぎ込むが、金が少ないときは一枚ずつである。

このスロットマシーンをやっても一番悲しかったのが、コインを一枚しか入れていなくて三〇〇枚が当たったということだ。これがコイン三枚だったら六〇〇枚…世の中上手く出来ているものだ。そのあとは、吸い取られるように無くなっていったのだが、コツの分かっている人は、きっと次に出る台に移って行くのだろう。それにしても、あの人が列をなしている人気の台でやってみたかった。MGMでの、その台の在処はエレベーターの側である。

尚、その日は適当に、挨拶程度としてカジノを後にした。

－MGMアドベンチャー－

翌日の行動予定は、一日MGMアドベンチャー周遊というものだった。これは、MGMグランドの中にある遊技施設で、その日は一日周遊券を貰っていたので、エンジョイしなかった。

しかし、疲れというものは恐いもので、ほぼ昼くらいまでは熟睡状態だったのだ。その傾向も最初からあったので、部屋の外には「起こさないで下さい」の札を出して置いた。これは正解だった。

このMGMアドベンチャーは午前十時から、午後十時まで運営しており、入場者は、手にプラスチックかビニールで出来ているリングをされて、出入り自由となっていた。しかし、厳密に言うところのリングは乗り物だけに关系し、乗り物に乗らないのであれば、入場自由でもあった。

支度を済ませ、ホテルを出た。しかも、食事もしないままで外だが、これが暑いなの、しかも腹が減ってくるのはダブルパンチである。受付で先ほどのプラリングをしてもらおう。パチリと封印すれば、ハサミか何かを入れない限り、もう二度と取れないのである。

ガラガラと棒が回転する入場口を通過すると、そこは小さなディズニーランド風の施設がある。ロサンゼルス

ユニバーサル・スタジオにも行きたかったのだが、日数的に慌ただしくなると思って、今回はこのMGMアドベンチャーにしたのだ。ここもユニバーサルと同じくMGMという映画会社のテーマパークなので、なかなか凝っているのだ。中に入って驚くのは、あちらこちらで結婚式をやっているということだ。結構安く、結婚式が上げられるらしく、シンプルに小人数で式を上げている。こちらでいえば身内だけの結婚式といった感じだが、結構楽しそうである。

さらに、あちこちから色々な音楽が流れてきて、にぎやかな所でもある。音楽といっても、テープを流しているだけではなくて、実際に演奏しているカルテットやトリオで踊りと歌を披露するものなど、さまざまである。さらに、この中では、ミッキーマウスならぬポパイ軍団があちこちに点在するのだ。みやげ物屋もあるが、レストランやかき氷等を売っている店もある。その間には、色々な乗り物の入り口がある。ここは、乗り物の待ち時間が最高に長くて十五分程度で、それは、客のことを考えて、入場制限をしているとのことだ。

まずは、園内をグルリと一周してみる、そこで暑さのため冷たい物が飲みたくなった。すると、丁度目の前にハーゲンダッツの看板があった。これは、わたしたちのために待っていたのかと、巨大なハーゲンダッツ（アイスクリーム）を買って座ってみるのだが、ここの気候というのは、非常に変わっているのだ。というのも、直射日光はすこぶる暑いのだが、日陰に入れば結構しのげる。しかも、風が吹いてくるとそれなりに涼しいのである。ハーゲンダッツもBIGサイズなので、なかなか体も冷えてくるが、すぐにあのジンジンと人間バーベキュータイプの直射日光が待っているのである。

とりあえず何かに乗ってみようと、再び散策を始めるのだが、強烈な乗り物があった。これは、日本の遊園地にもよくあるウォータースライダータイプのもので、かなりの落差がある上から、木製に見立てたボートに乗り、滑り落ちて来るというものである。しかし、日本の物と大きく違うのは（わたしが見た物の中では）これだけ見事に、水が客にかかるというのはなかったと思うのだが…。ザンブどころではないのだ。ズウアーアーンブぐらい水が降りかかってきて、髪も服もベシヤベシヤである。それでも、こちらの人たちは、「ウワッハハ」「キャキャ」といって喜ぶのである。後で乗ってみれば良かったと後悔はしたが、これにはさすがに乗らなかったのである。

それで、実際にチャレンジしたのは、円形の（周りが大きなゴムタイヤ風）ボート…いや、タライといった方がいいだろうか…、に乗って川下りをするというものである。ビデオカメラやポータブルカメラの類を持っていたのだが、中央には水かぶり防止容器が設置されていて、その中にすべての持ち物を収納してイザ！出発である。わたしたちの、次に続いて来るもう一艘のタライには、外人の子供が男の子、女の子、それぞれ一人ずつ乗っていて、こちらの様子を見ては笑っているのである。ドンブラコ、ドンブラコと流れていくタライは、結構な迫力もので縦波が襲ってきて、ユラリユラーリと流されて行くのである。その中で、座っている向きを変えようとした瞬間である。わたしは、大タライの中でコケてしまった。下は濡れているから滑るのである。ステーン！といきましたね、これが…。さらに、立ち直り濁流の中を流れて行くと、上から滝が流れて来る場所を発見する。もう、この時点で気分はインディージョンズで、円形状のタライの中で立ち上がり、この滝をかわさなければズブ濡れ間違い無しである。はっ！ととと…はっ！

などと叫びながら、妻とわたしは右往左往して、なんとかこの難を逃れたのであるが、この滝は一箇所ではないのだ。終わったと思ったら、今度は滝ではなく水鉄砲のようにピューヒー！とあちこちから飛んでくるのである。後続部隊のアメリカチビどももガハハの笑いを飛ばしているのだが、こちらも必死である。正面に最後の上からの滝をかわせる場所に座ってホッとした瞬間、真後ろから大型水鉄砲の水が頭の真後ろを直撃した。うわっ！と叫んだ瞬間に、周りの観客およびアメリカンチビに笑われてしまった。何事も、最後まで気を抜いてはいけませんなーハハハ…。

この大型タライは別段高いところから落ちるとかはないので、その点だけは落ち着いて???乗っていられるのである。と、終点まで来てしまった。

さて、タライを降りた後に、腹が減っていること思ひだし、何か喰うぞ！ということになった。腕にしている緑色のプラリングを見てムフフと笑い、そうか何度でもここから出入りが効くのだとアドベンチャーを後にする。ここからホテル内に入るとまるで天国だ。冷房がスーッ！と体を冷やしてくれ、冷静な判断も出来そうだった。そこで、確かに冷静な判断となったのだ。それは、すぐさまアドベンチャーに戻り、あの中のレストランで喰うということだった。せっかく来た路を、再び戻り猛暑の中に突入である。（どこが冷静な判断なんだろう）確か、大きなショーボートのレストランがあったので、そこにしようといざ向かったが、覗いてみると、ただのファーストフードであった。判断を誤ったわたしたちは、仕方なくもう少し散策し、ハンバーガー屋を通り過ぎ、この次にレストランがなかったら面倒だから、ハンバーガーにしようと、少し歩いたが空腹の方が意志よりも強く、結局ハンバーガーショップへ飛

び込むこととなってしまった。いや、いいのだ。これでいいのだと自分と妻に言い聞かせ、パンから溢れ出ている具をすするようにしてハンバーガーを喰ったのである。

一休憩して、さあ！今度はマップを頼りに順番に乗り物に乗ってみようとアトラクションを本格的に歩き始めた。よくマップを見るといろいろと載っているではないか。そうして、食後最初に並んだのが、何か分からなかったが宇宙探検っぽいものだった。並ぶこと十五分、途中で謎が解けた。要するにこいつは、屋内ジェットコースターである。そうか、そうだったのかと薄ぐらい洞窟の中の列に続き、自分たちの番がやってきた。わたしたちの前にいた夫婦の旦那の方は大男で二メートルくらいある無表情な奴で、入墨者である。こちらでは、大勢の人が入墨をいれているのだが、とにかくこの大男、一周してきても無表情であった。相当根性が座っていると見た。ここに来るとデブのわたしも、かなり小型デブの分類に所属するので、多少気も緩むというものである。と、気が付いたらジェットコースターの椅子にくくりつけられているではないか。オオオと思った瞬間には、闇の中にきらめくライトの中を、グオオオという音を立てて、走りまくっていた。しかし、思っていたほどの豪快さはなかった。コースも短いようで一瞬で終わってしまう。

しかし、外に出て気が付いたのだが、出口にはフォトショップがあり、いつ撮られたのか、バカ面をした中年小型デブ大和民族オヤジが驚きの表情をして、写っているではないか。ここでは、コースターに乗った人の絶叫時の写真が自動的に写し取られ、沢山あるブラウン管の中で表示されるようになっていた。その画面には、番号が振られていて、

希望があれば写真を焼いてくれる。

続いて、乗ったのが地底を想定した乗り物なのだが、これは先ほどのより待ち時間が少なかった。しかし、アメリカ人らしく待っている間、わたしたちの前の中年夫婦は、足の蹴り合いをしてじゃれあっていた。時折キスシーンなんかもあった。ここでの地底探査の乗り物は、中に座ると乗り物のハッチが完全に閉められて、グゴゴゴ…と揺れ始めるのだ。レールを伝わって行くのだが、正面には大型のディスプレイがあり、疑似的な世界が広がる。いかにも地底に潜って行くようなスリルとサスペンスが味わえるわけだ。時折、自動的に窓が開かれ、そこには氷の世界あり、溶岩の世界ありである。氷の世界では、大きなタコの足が忍び寄って来るが、なぜに冷凍タコになっていないか疑問である。かと思えば、ちゃんと正面のディスプレイにもたこ足が、凍り付いたガラスを拭き取るのだ。そういった、細かな動きがあるたびに、乗っているアメリカ人はグワハハハ…と笑う。よく笑う人たちだ。ここは、恐い乗り物ではないが単なる冒険劇といえよう。

さてさて、次に乗ったのが、ガイド付のボートである。ガイドはエンジンボートを正面で操縦しながら、疑似ジャングルを案内してくれる訳である。このコーナーでは数台のボートがあるらしかったが、わたしたちの乗ったボートのガイドは白髪の老人であった。ボートには二〇人程乗り込む。わたしたちは一番後ろ席に座らされていて、前の方では張り切ったガイドジジイが、ひたすら喋りつつけているのだ。しかも出航の合図がなっても、なかなかエンジン出力を上げずに停泊したままで、いったいどうしたかと言えば、前に座った少年たちにどこから来たのかとか、そう

いった話を長々としているのだ。溜りかねた港の係員が、腕時計を見せて、人差し指をグルグルさせながら早くという合図を送り、やっとエンジンがグロロロ…と回転したのである。ここは、TVで紹介していたのに行く前に見たので、大体の察しは付いていたのだが、まずは水中から半魚人がグワワ…と現れて、オーオーオー！とガイドの白髪じいさんが叫ぶのである。残念ながら、わたしたちの座っていた場所からは、ほとんど見えない状態だったが、すぐ脇に座っていた人たちは、ドッと驚いたようだった。

さらに、いくつかの仕掛けの中をボートが進んで行くと、地獄の黙示録の場面に遭遇するのだ。ここでは、大きな音響で、あの黙示録テーマが流れて、まさにあちこちにヘリコプターが飛来したような音が聞こえて来る。…と、すぐ左手の岩陰からヘリコプターが舞い上がり、わたしたちのボートめがけて機関銃を発砲してくるのだ。水面からはあちこちで機関銃の弾によるバシャバシャという水しぶきが上がり。ロケット弾によるドカーン！という水しぶきも共に上がりなかなかの迫力ものである。最後に小屋らしきところが、爆弾で破壊されて、ボートはそこを通り抜けて行くのだ。それにしても、あのガイドのじいさんは、撃たれたふりをしたり、地震のようになったときはボートの上で転がり忙しいのである。一日いっぱいあんなことをしているにも関わらず、とにかく明るく元気である。

さて、いよいよ最後に乗った乗り物であるが。ここでは、洞穴のおばけ屋敷風のところをトロッコのようなもので探索するのであるが、いきなりビデオの撮影を禁止されてしまった。なぜか、分からないのだが、イソイソとカメラをしまった。結局は、ただ単に洞窟の中のガイコツやらインディアンの映像をトロッコに乗って観察するだけなのだ

が、魂でも取られるとでも思われたのだろうか。

まだまだ、乗り物はあったのだが、ここら辺で乗り物にのるのは、やめたのである。

夕方になって、アドベンチャーの中を歩いていると、陽気な生演奏の音楽とともに、ポパイ、オリーブ、プルートが踊っている。その横を通り抜けると合成写真コーナーがあった。合成写真とは、観光地などに行くと顔の部分だけ穴があいていて、そこから顔をニョキリと出して、浦島太郎になったり金太郎になったりお姫様になったりというありがちなもので、まあ、その現代版といったところだろう。元となる写真があり、その顔の部分だけが白く抜かれている。そこに、他人の顔をビデオカメラを使って合成しようというもので、見ていると酷く滑稽なのである。ビーチに水着姿でポーズをつけているところへ別の撮影場所に立ってビデオ係りが、顔の部分をあてはめていく。すると、どことなくおかしさがこみ上げてきて、周りの観衆からヤンヤヤンヤと笑いが飛ぶのである。妻はわたしにやってみろというが、この人混みの中であれだけ目立つのは、いやだったので断った。

しかし、そのコーナーの女の人が、わたしの方を見て、大声で叫んだ。

「ちょっと、あんた！ランボーをバックで撮ってよ！」

「ええっ？」

と思ったが再び妻が、やったらというので、そうかなあ恥ずかしいなあと思いつつもどうせ異国なのだからという開き直りから、ヨッシャー！と勇ましく、志願したのである。係りの人は、

「やっぱり、やるんだね！…バックはどれ？」

「ランボー！」

と言って、結局ランボーをバックで撮影することになり、闇の中にわたしの怪しい顔が、スポットライトを浴びて浮かび上がった。ここまできたら後戻りは出来ないのである。

そうして、ジャングルストームのランボーに、わたしの顔がはまると、辺りからドッと今まで以上の歓声と笑いが、飛び交った。

「グレート！」

撮られている本人には見えないので、見るのが恐かったが、どんなだろうと見てみると、うっぷ！と吹き出してしまった。自分で見ても、このアンバランスさが異常におかしいのだから他人が見たら吹き出すのは、間違いなかった。いつしか、わたしはランボー化して、MGMの中を歩いていたのだ。撮影した物は、Tシャツと写真立てに収まったのである。

いよいよ、時間も過ぎて閉園まで残り一時間となった。そこで、ギリギリまでここにいても、しょうがないとアドベンチャーを後にしたのである。

MGMを出ると無性に腹が減ってきた。これは、ファーストフードという訳にはいかないぞと、レストランに入ることにした。ここで、入ったレストランはMGM内にあるレストランで、カジノのど真ん中のレストランだった。

何を食べるかとメニューを見たが、注文した中味はファーストフードっぽい気もした。というのも、注文したのはサンドイッチである。実際に物が運ばれてきて驚くのだが。サラダだけでもBIGサイズで、注文は一つで良かったと思う。アメリカでは、野菜などをあまりよく洗うという習慣がないから、何となくジャシジャシとしている気もするのだが、気のせいだろうか。たっぷりのサラダの後、皿の上に乗ったMGMオリジナルサンドイッチは、これー？どこがサンドイッチなのだろうという代物で、パンがホッケの開きのように開いた状態で持ってこられる。開いた片方のパンの上には、ぼてっとしたボリューム感のあるステーキが乗っているのだ。だから、フォークとステーキナイフが出てくる。

ステーキナイフで切り刻まれたステーキは、パンに挟み込まれるが、高さが十センチ近くになるので、これってどうやって喰うのだろうと「???」マークが登場し、しばし周りの様子を伺うのだった。

そこで、左斜め前にいる太ったオジハンが、丁度食らいつくところだった。すると、見事なまでの大きなジョーズ口で、サンドイッチに噛みついていくのだ。やはり、どうもこれはフォークとナイフで、セコセコと喰う物ではないようだ。わたしも口の高さよりあるサンドイッチをウウウと言いながら喰ってやったのだ。しかし、喰うとこいつは旨い。ホホホ…と微笑むわたしの前に、妻の注文した、なんだがサンドイッチという別種のものがあり、それは本来のサンドイッチに限りなく近いのである。といっても、やはり、五段重ねくらいはありそうなので（サイズ自体は小さいので食べ易そうである）バラして喰うことにしたようだ。サラダのボリュームでパンチを喰らった妻は、サンドイ

ッチがほとんど喰えず、かといって、わたしもボリュームのあるステーキサンド喰った後だったので、ほとんど残す形となってしまった。ここで、折り箱でもあれば、詰めて夜食…いや夜中食とすることができたかもしれない。

この巨人の国にずっといたら、きっとわたしは、今の二倍になることは間違いなからう。

さらに決まって、寝る前はカジノである。ここでギャンブル好きな人はも寝る前と言わず四六時中カジノであろう。

レストランの中には、紫色の制服をまとい、

「キノー！」

と叫びながら、背中にKINOと書き込まれた女性が通過して行くのだ。もちろんレストランのテーブルの上にも、キノの用紙があり、いついかなる場所にしようとも、ラスベガスではカジノに浸れるのである。

しかし、わたしたちがやるのはひたすらスロットマシーンである。今日は、25セントの台にして、一ドル紙幣をつぎ込む。しかし、ここで注意しておかなければならないのが、チップ代の紙幣だけは常に数枚用意しておかなくてはならないということだ。ベッドメイクの人にも一ドル、何かあれば一ドル、チップはコインではダメなのである。(失礼にあたるらしい) さらに、一ドル紙幣はチップだけにとどまらず、バスに乗るための一ドル紙幣と、細かいのがたくさんいるのである。だから、財布の他に一ドル紙幣だけズボンのポケットにキッシリと持っていなければならないのである。そうして、そこそこカジノをやったあとは、決まって翌朝…いや、昼まで熟睡ということになるのだ。

ー頼むから起こさないでくれー！ー

朝は、夜遊びのために起きることができない。したがって、ホテルに決まりものの、「起こさないでくれー！」カードをドアの外に取り付けており、これが裏表間違えると、とんでもない事になりかねない。というのも裏側は、「すぐに、掃除しておくれー！」という札になっているからだ。

しかし、すっかり熟睡しているにも関わらず、ドアを数回ノックする音が聞こえた。いったいこんなに早くに誰だろう。まさか、掃除に来たのでは、札を間違えたかという心配もありながら、時計は十時を差していた。

「はい、誰ですか？」

といいつつも、ドアのスコップを覗きホテルの従業員らしき男が立っていたので、不用心にもドアを開けてしまったのだ。外国では、ニセ警官やニセホテルの従業員が非常に多くて、用心しなくてはならないのだが寝ぼけているせいもあって、気が付いたら正面に黒人のホテルマンが立っていたのだ。

「あんたの部屋のトイレがおかしいというので、見にきたんだが…」

「えっ、トイレ？」

「そうだ。トイレが壊れたって？」

「そ、そんなー！」

しかし、ホテルマンは許可もしないのにズカズカと入って来るのだ。そうして、トイレへ向かった。いったいどう

いう事なんだろうと思ったが、その勢いにはかなわなかった。やがて、男はトイレの排水レバーを回し、シャー！という水の流れを確認して、ニコッとした。

「あっ、大丈夫だね…どうも」

と言って、去って行ったのである。わたしと妻は、考えた末に眠い目を擦りながら、きっと誰かが部屋番号を間違えて、ホテルに知らせたんだ言った。わたしは時計を見て、もう少し寝ようとベッドに入ったのであるが、それから少しして再びドアをノックする音である。ケケケ…いい加減にしておくれ、「起こすな…」の札が見えんのかと、再びベッドから起こされるはめになってしまった。そうして、「なんですか」とドアを開けると、そこには、年輩の野球帽をかぶったニコリ顔の、いかにもアメリカンジジイが腰に、道具をぶら下げて、手にも器具をぶら下げて、

「やあ！トイレが壊れたって連絡がきたから、修理に来たよ」

と言い、わたしはそのトイレが、という言葉で、うんざりしてしまって、

「トイレなんて壊れちゃいないよ！」

と言った。しかし、そのジジイはニコリ顔を止めもせず、地からスマイルをキープしたまま。

「そう、壊れてなかったかい。じゃあ」

と言いながら去って言ってしまった。まったく、人騒がせなものだ。誰が部屋番号を間違えやがったんだ。たくもー！と思いつつベッドに戻り、もう来ないだろうと思ったが、どうも、これだけ起こされると眠ることもできずに、

頭の中にはスマイリージジイが焼き付いてしまった。仕方なく、行動を早めることにして起きたのだった。まあ、考え方によれば、これは早く起きて、ラスベガスをエンジョイしなさいということかもしれないと思った。

実は、あとで分かった事なのだが、トイレは壊れていたのだった。排水レバーが壊れていて、グラグラとしているのを妻とわたしは、思いだした。しかし、それを思いだしたのは、翌日部屋に戻ったときで、妻が、
「あれー？レバーが直っている」

と言ったため分かったのである。ということは、部屋番号を間違えたのではなく、部屋係が修理係に知らせたのだった。それにしても、札の出ているときだけはやめてくれい。

ーストリップ通りを一直線にー

ここラスベガスでは、メインとなるストリップ通りを中心に街が栄えている。他のところに比べれば、あまり道に迷うことなく観光を楽しむことができる。ストリップ通りには、キャットバス（断っておくが、トトロに出てくる猫バスではない）と呼ばれるものは、二十四時間運営されていて、端から端まで走ってくれるのである。さらに、トロリーバスというのがあり、これは電車の形をしたバスで、全く変わった乗り物だ。これは、夜中の二時まで走っている。前者のキャットバスは、一ドル五十セントで、どこまでも走ってくれるが、近場で降りるときは損をしたよう

な気になるかも知れない。トローリーバスの方は、一ドル十セントで、ホテルからホテルへとホテルにしか止まらないバスなのである。

さて、それではキャットバスに乗って、ストリップ通りを一直線に走ってみるとするかということで、バス停へ向かった。バス停では、日本のバスとは違って、時刻表というのがなくて適当なのである。それでもだいたい、十五分置きにやってくるのだ。バスは、通常の一両のものと、中間が蛇腹状のものでつながった二両のものがある。最初に乗ったのは、一両編成のもので、こちらの人々は、バス停に列を作って並んだりしないのである。しかし、ちゃんとモラルは守られていて、横入りしようなどという人は、一人もいないから見習うべきである。

実際に、バスに乗り込み先乗りで運賃を払うのだが、妻と二人合わせて三ドルそこで、一ドル紙幣を料金箱に入れていくと、気が付くとアレ？一ドル紙幣が二枚しかないではないか。そこで、ゴソゴソとポケットから出てきたのは、五ドル紙幣で、それを入れれば釣り銭でも出てくるかと思ったのだが、紙幣を投入するまえに、女のドライバーに、

「ダメダメ！」

と断られたのである。

「一ドル紙幣ないのかい？」

というので、五ドル紙幣を見せて、

「五ドルならあるが」と言ったのだが、呆れた顔をされて、

「いいよ、じゃあ乗んなよ！」

と、指を座席の方へ差したのだ。ちょっと、両替してくれればいいのにと思いつつも得した気持ちで、椅子に座った。

しかし、これもドライバー次第ということが分かった。できるだけ小銭を作っておくようにはしたが、後で乗った二両編成のキャットバスは、ピッタリでないと乗せてくれないのである。このことは、さらに後で紹介しよう。

やがて、オートマチック仕様のバスは、結構揺れながら進んでいくのだが、スピーカーがある訳でなく、運転手は大きな声で、

「次は、バリーとアラジンホテルだよー！…だれも、降りないのかい？」

と叫ぶのである。バスを降りたい時は、窓の上に張り巡らされた、ワイヤーを引っ張るのである。日本のバスだったら、ボタンを押せば、「次は停車します」というランプが点灯し、停車の合図を知らせるのだが、ここでは、結構ワイルドである。とりあえず、わたしたちはサーカスサーカスというホテルの裏にある、グランド・スラム・キャニオンという、ピンク色のドーム内にある遊園地へ行こうとサーカスサーカスで、バスを降りたのである。

バスを降りると、丁度ストリップ通りを挟んで反対側にサーカスサーカスがあり、信号を使って道路を渡らなくてはならないのであるが、アメリカの信号というのは、本当にわかりにくく、(シアトルでも同じように困った) 歩行者

用の歩けというランプが点いたらすぐに手のマークの点滅に変わるのである。この点滅が点灯に変わると止まれなのだが、どうも、この辺の人々は適当なのである。最初は知らないで、もう信号が変わるのかと、慌てて駆け出すのであるが、人々はめったに走らず、優々と歩いて行くのである。だから、いちばん良いのは、周りの人々に合わせて、車が来ていなければ、歩いていくというふうにすればいいのだ。大体、この国では歩行者がかなり優先されていて、よほどの事がないかぎりひき殺されることなんてないのだから。

道路を渡ると、ピエロがモチーフされているサーカスサーカスが目に入る。こんなにぎやかな装いでも、一応はホテルなのであるが、ここでの特徴は無料でサーカスが見られるということなのだ。どこのホテルでも何らかのイベントをやっていて、初日にMGMやルクソール、エクスカリバーと夜に回ったときには、エクスカリバーの向かいの（エクスカリバーの斜め向かいがMGM）トロピカーナというホテルの前を通りかかったとき、突然ショーが始まったのである。ショーといっても、ホテルの表にある滝および噴水のところで、突然音楽が鳴り、噴水がレーザー光線などにより見事に演出されて、まるで花火のような状態になるのだ。しかも、音楽に合わせてそれらが色々と変化する。中には、トロピカーナの宣伝も入っているのだが、つつい幻想的な雰囲気に入ってしまうのだ。というのも、最初に霧のようなものが立ちこめてきて、語り掛けるようなナレーションが入り人々の足を止めるのだ。ナレーションを言っている最中は、レーザー光線によって写し出された顔が登場する。次に曲名が分からないのだが、いかにも、パラダイスといった曲が流れ、通路を挟んで右に左にと光と水のファンタジーが入り乱れるのだ。最後まで、見たか

ったのだがとにかく、そのときは、先を急いでしまった。

そんな、どこでも無料で見れるような、ショーがあるので金を掛けなくても、結構楽しめたりするのだ。しかし、この日はショーの申し込みをするために、リビエラホテルまで行かなければならないという使命もあったのだ。と、言いつつも、グランド・スラム・キャニオンへ入って行った。中に入ると、やはりカジノが並んでいて、凄い人混みだった。そのカジノの、ど真ん中を通り抜けていくと、グランド・スラム・キャニオンがある。ここでも、MGMアドベンチャーと同じように、腕輪をされるのだ。しかし、ここでの乗り物はどちらかといえば、子供向けのものが多く、この腕輪をするまでもなく、単体で乗り物券を買った方が良かったようである。

まあそれにしても、ここはでっかいドームの中なのでドームギリギリを通過するメインのジェットコースターは、さすがに迫力ものである。さっそく、これに乗ることにしたが、まったくといっていい程、待ち時間がなかった。それでいて、走っている時間が結構長いのである。

いざ、座席に付くと結構緊張し、いきなり走り出すのであるが、ジェットコースター特有の、あのかしこまった雰囲気が少ないのである。わたしが言っているかしこまったスタイルというのは、いざ！と走り出す前のガタリガタリと頂上まで昇って行くあの感覚のことである。というのも、走りだしたらいきなり、ガタリガタリではなくて、すこしシュワー！と走り込んでからガタリガタリとなるためかもしれないし、ガタリガタリの期間が短いのである。しかも、その短い時間の昇る速度もガタリガタリではなく、ダッダッダッ…ときわめて早いのである。と、思った瞬間ゴ

ゴゴーという音とともに、滑り始めたのである。オオオ！と叫びたくなる…、いや、すでに叫んでいる。ドームのピンク色のガラスと周りにある疑似的に作られた岩が、逆さになったり迫ってきたりで、恐怖の絶頂を迎え、あっ！と気が付くと自分の真上に通路を歩いている人がいるのだ。平行感覚を完全に失いつつ、さらに、回転を続けて一瞬暗闇のトンネルに突入した。この一瞬見えない状態からの急降下というのは、腹の中の心臓、胃、大腸、小腸、肝臓、すい臓のすべての器官が持ち上げられ、異常な恐怖心へとかられる訳である。さらに、上昇したあと、再びオオオ！の境地に立った直後、コースターは、急速に制動し、ホッ！とため息を付くのである。

コースターから、ニヤラニヤラと笑いながら降りると、妻共々足がガクガクでまっすぐ歩けないのである。いろいろな、コースターに乗ったが、こんな足がガクガクになったことは初めてだった。特別規模が大きな訳でもないのに何故！と首を傾げた。

ここで、絶叫時に勝手に撮られた、グハハハ写真を購入して腹ごしらいをすることにした。しかし、やはり損をしたなと思うのは、実際に乗ったのは、このコースターだけだったからである。

ここでの昼食は何にしようかと思い、歩き回った。岩のあちこちにある、電気仕掛の恐竜たちの間を抜けて、輪投げやゴーカートの間も抜けて行くと、すっかりおなじみのファーストフードがあった。またこれかー？と、少しばかり後ずさりをして、階上への階段があり、レストランなどと買いてあったので、コツコツを階段を上がって行くと、そこもファーストフードだった。くそー！と再び階下へ降りて、あきらめてファーストフードの物を喰うことにした

のだ。

そこでは、なんだかもう何でもいいやという気持ちから、妻はスペルの読めないチーズなんとやらを注文した。

「あのうー？あそこを書いてある、チーズなんとやらを下さい」

「ああ、チーズなんとやらね。んで、肉も乗せるかい？」などと聞いてきたので、

「ええ！」などと、気軽に答える。さらに、わたしはハンバーガーを注文した。それで、注文の品が登場すると、妻のチーズなんちゃらは、チーズチップスに、液体状のチーズがこってりとかかり、挽肉がふりかかっている。わたしのハンバーガーも、挽肉状のバラバラしたものが挟まっているといったところだ。大事な食事を持って、テーブルに付くと、小さい子が不思議そうに、わたしたちのところを見つめていた。妻の液体チーズのふりかかった、この液体チーズはアメリカでは定版といえるほど良く登場し、冷めても液状のものなのである。しかし、これは、結構くどいのである。一応、フォークとナイフなどを用意したが、周りの様子を伺うと、手づかみで食べるものらしいと判明した。

クドクドの昼食を、食べ終わると館内を一周し、レーザー光線の戦いのようなステージがあり、列を作っていた。

そこに並んでいる前には、係の女の人が、胸に装備のようなものを取り付けていて、なるほど、これを付けてレーザーガンで撃ち合いをするのだなと、一度は並んでみたが途中で面倒になり、列を外れた。あとで後悔したが一度、入ってみればよかった。

MGMアドベンチャーよりもつまらないと思ったわたしたちは、その後、そこを出ることにした。

さて、遊び場を出るときには、再び入場すると思われる人々の手にスタンプをするのであるが、わたしたちも一応スタンプをされ、しかしながら、もう二度と戻って来ることもなく、今度はリビエラというホテルに、スプラッシュという人魚をテーマにしたショーの予約に行くことにしたのだ。これらのショーも、旅行社のオプション・ツアーなどで申し込むと、三倍以上は取られることも分かっていたので、自分たちで申し込むことにした。まともに、全部「はい」という返事をしたら、大変な出費になるので、注意しなければならないのだ。前にシアトルへ行ったときも、現地係員が四～五万円でどこどこのツアーの手続きをしてあげるなどと、パンフレットをよこしたことがあり、自分たちで予約したら、数千円で済んでしまったのである。

リビエラに着いて窓口に行くと、今晚でも明日でも席が取れるということだったので、今晚の七時三〇分の予約を取った。

次に、シーザースパレスというホテル内にあるショッピング街を見ることにしたのだ。(本当は、雑誌などにも紹介されている、ファッションショーモールという有名なショッピング街を見たかったのだが、いつも閉まっているのである) ここまでは、けっこうあちらこちらを眺めては進んだので、ものすごく足が痛くなった。痛いながらも、半分マヒ状態で進んで行くと、結構な距離を移動したことになるってしまったのだが、途中にアメリカ映画特有のヒュウ、ヒュウとサイレンを鳴らして走る救急車に数回お目にかかった。おう、やっぱりここはアメリカなんだと実感しつつ、

焼かれるような暑さの中、一歩また一歩と進んで行き、シーザースパレスの前までたどり着いたのである。振り返ると、確実にキャットバスに乗らなければならない距離であると判明した。

その建物は白い建物で、正面からは動く歩道に乗ってホテル内に吸い込まれて行く、といったスタイルである。途中にその説明がスピーカーから流れてきた。一応、日本語でもアナウンスが流れ、唯一このホテルは他と違い、入口と出口が完全に別なのである。だから、ちょっとだけ寄って行こうなどと軽率な態度でも取ると大変な目に合うので用心が必要である。

吸い込まれた後は、奥深い通りが待っていて、天井は疑似的な空となっている。この空は、自動的に夕焼け空になったり、晴天になったりを繰り返していて、幻想的な一つの街を形づくっているのである。

通りに入って、すぐの右手にあるショップは、マグネット・ショップで、それは、メモ用紙等をクリップするためのマグネット専門店で、店内は下から全く手の届かない三メートル以上はありそうな天井に至るまで、各種マグネットが見事に陳列されているのである。こんな中に一日中いたら、何万ガウスの磁力できっと肩凝りなどはしないだろうなあと思いつつ、マグネットを一つずつ見たのだ。隣で見ていた人は、

「見ろよ！これ…スシだぜハハハ…」

と、取り上げて笑っていた。マグネットには、カクテルの形をしたものやトースターやら、とにかく色々な形のマグネットが、コレデモカ！と言わんばかりの量で、結局わたしはパソコン型のマグネットを買ってしまった。このマ

グネットはフロッピーが散乱し、パソコンの上には、ジュースやお菓子、キーボードの上には、メモ紙や鉛筆、消しゴムが散乱し、データが書き込まれたストックフォーム（コンピュータ用紙）などがグワワンと全体的に散乱していて楽しいものであった。この通路をさらに進んで行くと、左右には、びっしりと店が並び、さらにその先には、大きなドーム型の広場があり、噴水や中世の彫刻をモチーフしたものが登場し、なんだかヨーロッパ辺りでも散歩しているような、錯覚さえ与えてくれるのだ。人々は、広場でアイスクリームやソーダーなどを飲んで、噴水広場に腰掛けたり、ものすごい数の人混みが往来していたり、いったいここはどこなんだろうと思ってしまう。

それにしても、いざ出口はどこだろうと探すと、今度は迷子になるのであった。というのも、出口などという表示はどこにもなく、ひたすら、足と効かせた鼻だけが頼りであった。故障した足を引きずりながら、再び巨大カジノの中を通過して、「うむー、だめだ！…出口が見つからない」と焦ってみたのだ。

と、そのとき外の明かりらしき所が見えてきたので、

「やったー！外に出れるぞ」

と喜んで見たのである。しかし、それは大きな間違いだった。いざ、扉を開けてみると、目の前には、巨大なプールが登場し、縦看板があった。

「ホテル客専用プール」

などと書いてあるではないか。ということは、ここは中庭なのだ。仕方無く意味もなく写真だけを、記念に納めて

再び迷路のアドベンチャーへと出かけたのである。カジノに突入し、ガードマンが立っていたので、出口を尋ねると、ガードマンは、ハハハ…と笑いながら左手を指さした。

「すぐそこじゃないか。見えるだろ」

と言い、散々探したのに既に出口の目前まで来ていたのだった。なんだあと妻と二人して、出口から再び灼熱地獄へと出て行ったのだった。

この外の灼熱と室内の冷房とを繰り返して、またもや、ストリップ通りを歩いていくと、道路の中央分離帯および、道路の真ん中に青色の長靴を持った消防隊員が、大声で叫びながら何かをアピールしているのである。いったい何だろうと道路の端を見ると、黄色く塗られた、かなり大きな消防自動車置いてあり、そこからも、数人の消防隊員が降りてきたのである。どうやら彼らは、消防隊員の赤い野球帽を販売しているらしく、コミコミ状態の道路で、一台一台の車に、

「かっこいい、消防隊員の帽子いらんかエー」

などと、叫んでいるのである。そうか、消防隊員はこんなことをして、副収入を稼いでいるのかと思いつつ、なかなか売れずにヤキモキしている消防隊員の表情が印象的だった。と、時計の針を見ると四時を回っていたので、これは？と思いショーを見に行くための準備をするために、ホテルへ戻らなければと、キャットバスに乗り込んだ。一応、ショーの場合は、短パンにTシャツは禁止となっているのである。

－華やかなスプラッシュ－

午後七時三〇分の予約をしていたスプラッシュ。日本でもシレラなどという水中ショーなどをやっていたので、きっとそういったのが見られるのではという、ウフフ的心境になっていた。部屋では軽くひと休みをして、故障した足の半修理を済ませたつもりで、ショーのための準備をしたのだ。

準備完了後は、予想したより結構なキツキツの時間となってしまって、焦りながら、キャットバスの停留所へと急ぐが、小銭が無かったので、MGMの中の売店にて、ビールを購入する。ここで、一気にグビグビとバドワイザーを飲んで、バス停に立つが、なかなかやって来ないのである。こういうときに限ってなんですぐに来ないんだと、時計とにらめっこをしたあと、二両連結のバスがやってくるのだった。随分と乗る人がいるなあ、と思いながらもやっこのことで、バスに乗り込み、へへへちゃっんと両替してあるもんね、と一ドル紙幣を三枚料金箱に入れ、奥へ乗り込むのであった。

やがて、バスは走りだしたが、バスの前にトロトロと走る乗用車が居て、（まあ、道路もかなり渋滞しているのだが）黒人のバス運転手は、プッポーとクラクションを鳴らすのである。さらに、大きな声で、
「どけろ！のんま野郎どけろ！」

と叫ぶのだが、日本ではバスドライバーもこんな行動はしないぞと感心した。しかし、叫ぶバス運転手も運転手だ

が、運転手のすぐ後ろに座っていた客も、

「ありゃーどうしようもないノロマだぜ」

というのである。

「ああ、困ったやろだ」

プップーと鳴らし、バスは強引にノロマ野郎を排除してしまった。しかし、ここでわたしたちは、時計に目をやると既に、七時を一〇分も過ぎていて、まさかこんな渋滞に、悩まされるとは思わなかったのである。

次の停留所では、再びたくさんの乗客が並んでいた。うわあー、こりゃ間に合わないぞと思ったとき、先日乗ったバス運転手だったらよかったのだが、この運転手はとことん細かいドライバーで、乗客の一人が五セント足りなく、引き留めた。しかし、ポケットの中にも小銭はなく、ウロウロとしているのだ。

「また、今度払うからいいだろ」

「だめだ、五セント足りない」

と絶対に引かないのである。その間結構な時間が過ぎて行き、とうとう後ろから来たキャットバスが追い抜いて行った。えええっ！路線バスなのに次のバスが先に行くなんてと思いつつ、困り果てた他の乗客が五セントを出したようだった。座ってから、

「まったく、細かい野郎だぜ」

とブツクサ文句を言っていたが、金を持っていないお前が悪いんだよと、心の中で思った。おかげで、ショーには絶対に間に合わないという状態に陥ってしまったのである。真っ暗夜にきらびやかなネオンが栄え、リビエラの文字が見えたので、ここで降りるんだと間違っ一つ手前で降りてしまったのだった。なんでこうなるのと、全然故障から復帰していない足を引きずりながら、人混みの中を走ったり歩いたりした。ハアハア、ゼイゼイとリビエラの中に入り、スプラッシュはどこだと、あちこちの店員に尋ねて会場までたどり着くと、ショーの最中で待てと言われてしまった。ショーに遅れるなんてことは最低の侮辱であるのは分かっていたが、会場の前では、中に飛んで行く鳥が待機していて、扉を開けると同時に会場の中から、わー！という歓声が上がりバタバタと飛び立って行った。その直後は、どうぞとニコリと挨拶をされて中に案内されたのだった。

予約した席は、会場の中央程に位置し、案内してくれた係の人にチップを渡した。早くに来ている人は飲物が配られたらしい。それと、後で分かったことだが、肝心のスプラッシュは、わたしたちが来る前の短い時間に終わってしまったようであった。予想していた、水中ショーとはかけ離れたもので、いろいろなショーが組合わさっているものだったのだ。入ったときにやっていたショーは鳥を使った芸当で、客のテーブルの上に用意された光る輪の中を、ステージから放たれた鳥が通過して、再びステージへと戻るものだった。とにかく、すべてのショーがものすごい迫力で、中にはサーカスなどでよくお目にかかる、物を空中に数個投げてクルクルと回すというものがあり、この芸をやっていた男の人が特に面白かった。

というのも、前の方の席に日本人が居たらしく、

「今日は、遠い日本からのお客さんもいますね」

と言いつつ、日本語で、

「コンニチハ、アリガトウゴザイマス、マイドオオキニ」

なんて、お決まりのカタコト日本語を披露し、続けて

「日本の人たちの、喜び方は面白い、まるで鳥の鳴き声のようですね」

などと言いやがるのである。ムムムと思いつつも、どうもこの人の間の取り方が異常に面白く、笑い続けてしまった。

凄いと言えば、またもやサーカスの中で登場するバイクの玉の中での回転劇があり、これが半端ではないのだ。わたしが今まで見たのは、バイクが一台で玉の中をグルグルと回るものが、ほとんどだったが、ここのステージでは、結構小さな玉でバイクにまたがった状態で人間の頭が、玉の中央に来るほどのもので、その中に三台のバイクが入り、一斉にグワワン…グワワンと回るのである。しかも、結構なスピードで回転するので、ぶつかりはしないかとヒヤヒヤものであった。凄いの一言で、妻とわたしは感激してしまった。

このショーではほとんどが、ダンサーによるミュージカルで、マイケルジャクソンものが多かったが、やはり本場だけあって、踊りがうまいのである。見逃した水中ショーではあったが時折水槽の中で踊るシーンも見ることができ

た。それなりの勢いで、一時間三〇分のショーは、あっという間に終わって、ステージを後にした。

そこを、出ると今度は腹が減ってきたので、レストランへ行くことにして、再びキャットバスへ乗り込む。

今度は、時間に制限がないので大丈夫だ。しかし、バス停には、酔いつぶれた車椅子の太ったオバハンがぐったりとベンチに横たわり、高いびきで寝ていた。大丈夫なんだろうかと思いつつ、通り過ぎて行く人々は、呆れた顔をしていた。実に酒臭かった。

レストランは、遅い時間でもやっていて、しかも予約無しで入れるところということで、アラジンというところに入ったが、レストランの前では結構な列となっているのだ。看板にあったステーキとロブスターで、七五〇円というのが気にいって入った訳なのであるが、やっと席についてほっとしたときに、ソファアームの上には（椅子ではなくソファアームなのだ）べったりと口紅の付いたナプキンが落ちていた。それを、摘むようにしてテーブルの上に置きボーイが来たときに、

「これー、こんなの落ちてたよ。おまけに、あそこを見てみろよ、スプーンまで落ちている」

と言ってやったのだ。

「いゃー、済みません。んで、注文は…」

と、ケロっとして現金な奴だと思ったが、看板に出ていた。ステーキ&ロブスターを注文した。料理の方は、ここは海から遠いためか今一だったが、充分腹を満たしてくれたのだった。それにしても、先ほどのボーイも結構、おっ

ちょこちょいで、わたしたちはステーキ&ロブスターを注文し、品を持ってきたな、置いたなあ、と思った瞬間アレーという表情をして、

「あっ。ごめんなさい、お客さんはチキンの方だったね」

と言って持ち去ろうとした。そこで、待て待てと呼び止めて、

「違うよ。それでいいんだよ。ステーキ&ロブスター！」

「ええっ？あれー？」

と伝票を見るのである。そうして、吹き出して

「あれー？ごめんなさい。ほんとだ！おれどうかしてるわハハハ…」

と笑いながら、料理を置いたのであった。どうも、ベガスへ来てからというもの随分とズッコケることが多いなと思いつつ、外に出たのである。

－真夜中の空中散歩－

一度ホテルに戻り、再び軽装になり、夜遊びおよび朝遊び状態のわたしたちは、いざラスベガスを空中から観察してみようと、ホテルに置いてあった雑誌の広告からヘリコプターツアーを発見し、ここへ行こうということになった

のだ。その場所も、前日に捜して置いたのだった。これはMGMのすぐ側で、歩いて行けるところだった。

日本だったらヘリコプターに乗るといったら万金を要求されるが、ここはとても安いのだ。二～三千円で飛んでくれる。まあ、この辺はあちこちに、軽飛行機やヘリコプターが飛び回っているのだが。

さてさて、目的の場所へ行くと、すでに数人の人が並んでいたが、音楽が流れて和やかなところであった。この時、時計の針を見たら夜中の一時三〇分であった。やはり、完全に不良オジン、オバンとなりつつも受付に向かうと、受付は金髪の女性だった。ムムムこんな時間に…。そうして、コースが三タイプあることが分かり、一番安い千九百円からあったが、三千九百円の一番高いのにした。待っていると、上空からピカリ、ピカリとランプを点滅させて、白地に青というカラーリングに星が散りばめられた、きれいなヘリコプターがバタバタと風を送って降りてきたのだ。ヘリから降りてきたのは、赤ちゃんを抱えたオバハンと家族連れだった。ヒョー！こんな時間にしかも、赤ちゃん連れてるなんて、やっぱりこの街はどうかしてると思った。数回、ヘリは乗客を乗せて上空へ上がって行った。(なにせ、ここには一機しかいないのだ)

やがて、乗客係のおねえさんが、中国人のカップルと一緒に乗せるという組合せをした。乗客係は、もう一人少しはげ上がったオヤジがいて、わたしが見る分には、どうもこいつがここのオーナーだなという気がした。男はヘリが降りると耳栓をして、ヘリに近づき、燃料を補給していたようであった。もうひとりの女性の係は、こっちへ来いといい、パイロットの横に、中国人の女性を乗せ、残りの中国人の男性とわたしたちは後ろに座らされた。合計五人乗り

のヘリは、やがてローターの回転を上げた。ヘリに乗り込む時に、ローターの下ではバタバタとものすごくうるさい音がしていたのだが、いざ乗り込み、ドアをボタンと閉めると、キーンという音に変わり、割と静かで快適な空の旅という感じが伝わってきたのである。というのも、わたしにとっては初めてのあこがれのヘリコプター体験だったからかもしれない。やがて、ふわりと空中に舞い上がりゆっくりと回転しながら、高度を上げて行った。予想したのとはかなり雰囲気が違い、もっとガンガンに揺れまくるのかと思ったら、すごく静かで全く揺れない乗り物であることが分かった。とにかく、旋回するときもほとんど真横を向くのであるが、落ちるー！などといった感覚はまったく感じられず、景色だけが動いているという感じだった。すっきりと、この空飛ぶゆりかごが気に入ってしまったのである。

さて、上空から見たラスベガスであるが、あちこちからのネオンがストリップ通りを中心にして、溢れているといった感じだった。でも、やはり地上からの方が迫力があつた。ヘリコプターのパイロットは、わたしたちが日本から来たと言うことを知って、

「日本から来たって！随分と遠いところから来たんだね」

と驚いていた。この辺は、東洋系と言っても二世か中国人がほとんどだから、驚いたのかも知れない。静かに遊覧を終えると、ヘリポートにドスンと着陸し、唯一振動が伝わった瞬間でもあったのだが、妻もヘリコプターがすっきりと気に入ってしまったようだった。そうか、自衛隊が毎日ヘリコプターで飛んでいるというのは、いつもこんな快

適なことをしているのか、うらやましいな思った。

帰りに、写真を受け取るために、もう一度受付へ行くのだが、乗客係と受付嬢が二人揃っていて、写真の処理をしているのだ。先に出来上がった中国人にその二人は、目の前のグラスに入っている紙幣を指さし、チップを下さいねと言うが、中国人は笑いながら、去って行ってしまった。受付の人たちは、呆れた顔をしたが、わたしたちがチップを入れたのを見て、ニコリとして、ありがとうと言った。きっと、あの中国人たちはケチというレッテルを貼られたのに違いない。

ーイベントだらけー

確実に翌日は、昼まで寝ているといった状態になり、散策へ行くために、再びサーカスサーカスの辺りでバスを降りた。ここでの楽しみというのは、すでに、グランド・スラム・キャニオンという遊園地を見学したので、無料で見ることができるサーカスへ向かった。カジノの中に入っていき、階段で二階へ上がると、そこは、ちょっとした遊技施設となっていて、セガなどの日本のテレビゲーム群が目立つ。ちょっと覗いてみようと思ったが、妻にゲームなら日本でしなさいと言われ、トボトボとチャイルド化したわたしは遊技施設から出てきた。その遊技施設の中央部は、サーカス会場となっていて、もうじき次のサーカスの始まる時間が迫っていた。見渡すとほとんど万席で、やっとの

思いで空席を発見したのである。隣には、かなり年輩のご老人が座り、さらに、その隣には、そのご老人とは無関係な、年令が全く不明な子どものようなインド系の女の人が、赤ちゃんを抱いていた。ええっ？この人親なのかと、もう一度のぞき込んでしまったが、さらにもう一人の小さい子どもが、その人に話しかけた。どうやら親子らしい。その子は、元気が良くわたしたちの前を、「ちょっとごめんね」と言って、通り過ぎて言った。そうか、こっちは小さくてもちゃんと挨拶をする習慣があるのだなと、改めて感心していると、マイクからの男性のアナウンスが聞こえて、いよいよサーカスが始まるようだった。

サーカスの内容としては、十才程の男の子と女の子が、それぞれ一人ずつ登場し、その子の親らしき男女も一緒に、両手を広げて登場するのである。

父親は、仰向けに寝ころび、その上で子どもたちが、クルクルと回転を始めたのである。実にうまいのである。ハハハ…スゴイ、スゴイ！と、思わず拍手を送ってしまった。周りからも、一区切りごとにドッと拍手が湧いたのである。しかし、隣に座っていたご老人は、口をポカンと開けたまま、無表情であった。いったい、なんだろう？

子どもは、一区切り終わると、必ず両手を広げて勝ち誇ったように、挨拶をする。この繰り返して、複数の妙技が繰り返されるが、アメリカらしくギャグも連発するのである。子どもがギャグをするというのもなかなか面白いものである。

そうこうしているうちに、妙技は一通り終わった。相変わらずご老人は、口を開けたままだった。

サーカスサーカスを出て、ショッピングに向かったが、この日も外はフライパンの上のように暑かった。シーザースパレスのショッピング街に再び入り、チョコレートの店で、超クドクドしいでかいチョコを目の辺りにして、うへー！と生唾を呑み込んだ。こいつは、超過激に甘いに違いない。リンゴ状の実物大になったチョコの固まりが棒に付き、縁日のリンゴ飴のようにしゃぶりながら歩いていたのを見かけたので、喰ってみようかと思ったが、やはりあいつを喰うには勇気が必要だと、あきらめたのである。

ここは、例によって外に出るには（入口と出口が別なため）かなり歩かなくてはならず、妻が途中から出れるに違いないと、ショッピングを終えたわたしたちは、途中にあった扉から外に出たのである。外に出ると確かにそこは、正真正銘の外なのだが、どうもだだっ広い駐車場のようであった。それで、駐車場とは、反対側のスリップ通りへ向けて、歩きだしたのだがどうも様子がおかしいのである。それに、段々と悪臭を放って行くではないか。さらに、人影が全く見あたらないのである。さらに、進んで行くとゴミの回収場があるのだった。そこはもう、暑さと臭さでとても耐えかねる場所で、鼻を摘みながら馬鹿な日本人二人は、道を引き返したのである。というのもその先は袋小路で、行き止まりだったからだ。

やはり、通常の長いカジノ周りコースを通過して、外に出るしかなかったのである。

ショッピングをしていると、時間の経つのも早く、段々と空が暗くなってきた。プレジャーアイランドというホテルの前では、海賊ショーが開かれているというので、それを見に行く事にした。ここは、連日昼夜ショーが行われて

いるのである。ホテルの正面は、宝島のような港になっていて疑似的な海があり、二艘の帆船が動いているのである。片方は、海賊船でもう片方は政府軍の船だ。この船のサイズもミニチュアではなく、かなりの大型のものだ。

そこには毎日の決戦があり、どちらが勝つかは分からないのだ。ショーの時間が迫ってくると、栈橋状の通路に（通常の歩道もすでに、栈橋状になっている）段々と人が集まり始める。わたしたちは、丁度一番前を陣取ることができたのだが、大きな木の柱の所で、右半分が隠れていて、その部分は見ることができなかった。

ビデオカメラを構えて、その光景をとらえていたのだが、すでに空は完全に真っ暗で、気が付くと自分の後ろは、もの凄い人だかりとなっていたのである。やはり、いつもやっているとはいえ人気があるのだ。それに、日本人以外の外人観光客も大勢いるので、その人たちが集まって来る。わたしの真後ろには、小さな黒人の子どもがいたが、これではまったく見えないだろうと思った。しかし、子どもたちは、その子たちだけではなく沢山あちこちにいたが、どの子も見えない様子だった。

そうこうしているうちに、海賊ショーは時間とともに突然始まるのだ。まずは海賊船に一艘のボートが到着し、帆船上の船員たちが大きな声で会話を始めるのだ。どうやら、金塊を持ち帰ったという設定らしい。そこへ遠くから政府軍の帆船がやってくる。

「船長！向こうに船が！」

船長は帆船を指さし戦闘準備をするといった具合いだ。やがて、ストーリーは展開して行き、大砲の撃ち合いが始

まる。ところが、この大砲の攻撃が半端じゃないのだ。イルミネーションによる炎を表した光ではなく、今にも消防車が飛んで来そうな豪快な炎が、爆音とともに帆船の上で燃え上がるのである。ドカーン！ドカーン！とにかくこの炎は、帆船からかなり離れているわたしたちの場所でも熱いほどなのだ。ドカーンという音とともに水面がバシャー！というものすごい柱を上げて、衝撃で船員はマストから水面へ樽と共に吹き飛ばされるのである。被弾したのは海賊船で、妻とわたしは海賊船が負けたんだというと、今度は海賊船の船長がロープを伝わって、被弾した船尾の炎の中から、船首へと飛び移って行き大声で、

「撃て！」

と叫ぶのである。その瞬間、今度は海賊船からの猛反撃で、政府軍の船はさらに炎を強め、ついには船が傾いていくというストーリーで、まるで何かの映画の中に自分たちがいるという、不思議な錯覚を起こさせる情景だった。

さらに、感心するのは数人が海面へ落ちるのであるが、ショーが終わるまで、死人ということで、水面にプカリプカリと浮いているのだ。いやー、大した物だ。やはり、ラスベガスだ。

そんなショーが終わると、急に喉が乾いてきた。これは、街行く人やカジノの中で飲んでいた、巨大なグラスに入った白い飲物やココア色した飲物が、何という名前か分からないが、どうしても飲みたいという心境に走り、隣にあるミラージュというホテルへなだれこんだ。

このミラージュというホテルは、正面に大きな噴水があり、次はこの前で繰り広げられる火山の噴火というショー

を見るといったこともあったので、好都合だったのである。

さて、中に入るとそこは立体的な空間なのである。どういう風かといえば、熱帯雨林の情景を造作してあり、椰子の木がホテル内にそびえているのと、天井は大きな温室状のガラスとなっている。さらに、フロントの後ろ側の壁は、大きなガラスの水槽となっていて、色々な熱帯魚がサメと一緒に優雅に泳いでいるのである。その熱帯雨林のジャングルの中にはバーがあり、よく見ると、そこで大勢の人がそれを飲んでいて、あれだと思い、すぐにバーに入った。わたしたちは、ウェイトレスが来てメニューも渡されることなく、さっそく注文を聞いてきたので、他の客の飲んでい
る奴を示し、あれと同じ物をくれと言ったのだ。ここでやっと、その飲物にありつくことができたのだ。後で分かったことだが、それはマルガリータというカクテルだった。乾いた喉を潤すには充分すぎる飲物で、あっという間に、妻とわたしは飲み干してしまったのである。やがて、歌手がステージに出てきて歌い始める準備を شدしたので、歌い出してからすぐに出るというのは失礼かなと思い、すぐにバーを出たのである。そうして、ジャングルの中を抜けて、ホテルの外に出ると、火山のショーがクライマックスを向かえていた。

「なんだ！もうやってるぞ」

と慌てて駆けつけたが、到着すると同時に観客が、去り始めた。ボカーン！ボカーン！と数回、高だかと上がった炎を見ただけで、肝心の火山ショーを見終わったのである。

実は、話はかなり前後していて、これは最終日の前日のことだったのだが、その前の日に、ルクソールというところ

ろへ行き、ショーを見たのだった。頭の中が整理されていないらしく、内容は覚えているのだが、順番がめちゃくちゃになってきた。しかし、ルクソールというところでは、（これも夜なのだが）ピラミッド状の館内で、三つのパピリオンがあり、数百円ほどでショーが見れるのである。これは、三つのパピリオンともストーリーが連動していて、実は一番から順番に見て行くらしいのだが、今のわたしの頭の中の混乱と同じように、順番はバラバラで、最後から見てしまったのである。

そこは3Dという看板があり、これは立体ショーに違いないと、会場に入って行った。入口では、プラスチックのメガネが配られたので、予想は的中した。そこで、中に入るとかなりの人が、入場口の前で立っていたので、並ぶのかと思って、その後ろに何気なく付いていたら、係の人がやってきて、

「並ばないでくれ」

と言ったのだ。全く変わっている。日本だったら我先にと並び、少しでも隙間があったら後ろからどんと押しつけて来るのに、そんなことは一切なく、バラバラなのである。しかし、この会場の場合は、いざ会場の開く時間となっても、ぜんぜん押せ押せムードなんてなくて、きちんとモラルが守られているのである。

さて、実際に時間が迫ってくると、どこからともなくスピーカーからの女性の声が聞こえてきて、よくよく見ると人混みの中に、ヘッドセットを付けた金髪女性が、堂々と歩いてきて、小高い台の上に立つのである。まだ、会場にも入っていないのに、パフォーマンスが始まった訳だ。周りには、巨大なブラウン管があり、そこにはステージの楽

屋裏らしき所や、ゲストの様子が写し出され、金髪ヘッドセットは、

「準備はもういいかい！」

「OK！いつでもどんとこいだ」

などとやりとりをしているのである。さらに、列にならずに並んでいる人々にも問いかけるのだ。

「本当に、見たいのかい？このショーを」

「もちろん！」

などと、声が上がり前置きが異常に長いのである。金髪ヘッドセットは、あちこちの客に指を差し、いろいろな質問を浴びせ、その応答を見ている周りの観衆は一斉に、

「イエー！」

などと、高島忠夫的な声を上げたりもする。場内は、禁煙で飲物も禁止だと、正面に立って飲物を飲んでいる若者に告げると、若者は「oh！」などと声を発して一気飲みした。若者はその空いたビンを、金髪ヘッドセットの足元に置くと、

「なんて人たちなの、そんなの自分で片づけなさい。わたしは、清掃係りじゃないのよハハハ…」

と呆れた表情をした。そうして、ブラウン管から飛び込んできた会場係りの早く入って来いよという声と共に入場が始まったのである。

チケットには、バーコードが付いていて、入口でピコッ！となぞってゲートを通過していくのである。会場内は、極度の急傾斜で座席が取り付けられていて、遙か下に小さなステージがある。さらに、あちこちに大型ブラウン管があり、きっと、ここから3Dの映像が飛び出すに違いないだろうという雰囲気である。画面には、ステージの幕の裏の様子が写されていて、金髪ヘッドセットとの連絡が飛び交っているのだ。早く幕が上がらないのかと思ったら、今度は何かの説明が始まったのである。というのは、「いいぞ！」というときは、そりサインのランプが点き、「だめだぞー！」というときは、ブーイングのランプが点灯するので、それに従って、みんなも声を上げて欲しいというのである。それで、幕が開く前に練習とやらで、一斉に声を上げたのである。これは、何か「笑っていいとも」のステージ見学のようなものである。(わたしは実際に行ったことはないが…)

散々前置きが長く、それではと幕が開いたときは、さらにドッと笑いが出てしまったのである。というのも、ステージの上は3Dならぬ2D…つまり、二次元状態なのである。ステージの上には、ステージと同じ大きさの画面があり、そこにゲストが写されているだけなのである。その様子に気が付いた客は、涙を流して笑っているのだ。

「なんだよ。これーハハハ…」

わたしたちも、この3Dというのは単なるギャグかと思った。すでに、メガネを掛けたり外したりしている客もあり、ギャグ連発のステージに場内は笑いの渦となっているのだ。

なんだ、騙されたのかとガッカリし、これがアメリカンジョークかと、メガネをブルブルと振り回していると、ステ

ージ展開の中で、エジプトの怪しい光る遺跡のようなものが出てきて、それをどこかにはめ込むと同時に金髪ヘッドセットは、「さあ！はじまるわよー！」という大声を上げた。その声で会場内の客は、一斉にメガネを掛けたのである。そうか、これが3Dだったのか、随分前置きが長いなと思いつつ、岩石がビュー！と目の前に飛んで来た。その光景に驚いた、どこか近所の女性が、

「キャー！」という悲鳴を上げたのである。周りからは、その声のため再び笑いの渦へと突入していったが、とにかく迫力と綺麗さで素晴らしいという言葉が出てしまった。

3Dの部分が終わると、その光る遺跡がステージ内に降りてきて、その遺跡をつかもうとしたスタッフの一人が消えてしまうというストーリーだった。最後まで金髪ヘッドセットは、

「これは、ハプニングです、スタッフが消えてしまいました。いったい、どこへ行ったんだろう」

と演技を続けていた。その間会場からは、客が席を立ち外へと流れて行ったのだった。

このパビリオンを出ると、他にもショーをやっているということに気が付き、わたしたちは、次のショーを見ることにした。

それにしても、気になるのが先ほど登場した遺跡型をモチーフにしたグラスに入った飲物だった。リットルビンの三分の二程の大きな青いグラスで、飲んでみたいと思ったのだ。しかし、先にショーを見ようということで、気が付いたら買うことをいつも忘れてしまって、結局買いそびれてしまったのだ。それにしても、あの入れ物だけでも、ル

クソールと刻まれ価値がありそうな気がした。しかし、飲み易さに関しては、また別の話しであるのだが。

さて、次のショーはナンバー 2 で、先ほどのがナンバー 3 である。ここは過去から未来へというタイトルのショーで、タイムマシンに乗って旅をするという設定だった。

さっそく会場内に入ると、先ほどの慌ただしさは全く無く、ここは超縦長湾曲型映画なのである。要するに、画面が縦に長いもので、高さは三階建ての建物ほどあるのだ。席に順番に座っていくと、
「バッグなどは下に置いて下さい」

などと、大げさなことをいうので、これは座っている部分がグラリグラリと揺れまくる奴かなと思った。第一薄暗くて、会場内が良く見えないのである。さらに、念を押すように膝の上に太い鉄の棒が降りてきて、下半身を支えたのである。(ジェットコースターのように) 隣にいたオバサンも、一瞬わたしたちの方を不安そうに見て、バッグを下に置いた。

やがて、正面のスクリーンに音響とともに、映像が現れたが巨大な映像なため、かなりの迫力ものだったのだ。しかし、実際には椅子自体は揺れることなく、ボディーソニックと呼ばれる大型なスピーカーが椅子に埋め込まれているだけであった。画面の中は、タイムマシンに乗っていくというスタイルなのだが、S F X がとても素晴らしかった。すっかりと幻想の世界に浸り、映画が終わると先ほど不安顔になっていたオバサンも、ニコリと笑みを返してきた。

ここまで体験すると結構疲れるもので、もう一つのパビリオンに入るのを止めたのであるが、そこがナンバー 1 で、

ストーリーの最初を見逃すこととなってしまったのである。

ルクソールの外では、噴水によって作り出されたスクリーンにエジプトの壁画調の絵が浮び上がり、これまたきれいなので、三脚を持ったカメラマンが数人写真を撮っていた。絵柄は全部で二四種類あるということである。

ー帰国前の慌ただしさー

こんな、素晴らしい毎日を過ごしてきたラスベガスではあったが、帰国の日は、早朝に起きないと間に合わないということで、寝ないでカジノやら散策を楽しむことにしたのだった。帰りはどうせ飛行機の中で寝なければならないのだから…。 最後に入ったレストランは早朝の四時で、このときはこんなに早朝なのに、どうして元気がいいのだろうと思うほどの、ピッシリと決めた黒人ボーイがレストランの中を、まるでロボットのように歩き回っているのがある。歩き方もテキパキテキパキと歩き、後ろ姿を眺めているとおかしくて吹き出してしまいそうだった。ここでも、またまた巨大なサンドイッチを喰い、帰りぎわにチップをテーブルの上に置くと、他のボーイやウェイトレスよりも、素早い行動で歩いてきて、

「どうも、ありがとうございました」

と言い、わたしたちが立ち上がり、二～三步歩くとすかさずチップを持って行ってしまった。それは、他のテーブル

ルでも同じ行動をしていたのを見ていたので、この人は調子のいい人なんだなと思った。

それで部屋に戻り、帰り自宅をしていると、結構時間が迫り眠い目を擦ったが、トイレにでもと思って、入ったまではよかったのだが、どうも前回したときに、わたしは、完全に流しきっていなくて詰まっていたようなのである。そのことに気が付き、ちょっと排水レバーをひねってみたのだが、突然水が流れずに便器の中で上昇してくるのである。わたしの頭の中にはジョーズの迫って来る音楽が流れ、どうしよう、どうしよう！止まれ！水よ止まれ！と叫んでは見たものの、ついには便器から溢れて、床中水まみれとなってしまったのだ。幸い、ウンをするまえで良かった。さらに、汚物も残っていなくて、ただの水だけで良かった。しかし、水浸しとなった風呂場の床にティッシュやらタオルやらを当てがったが、全然拭き取れず、時間も迫ってきたので困り果てたら、妻は部屋係が居るから始末してくれるよと、結局そのままの状態でご飯を食べて帰ったのだ。それと、サンフランシスコ空港で買ったパンも、結局食べないでゴミ箱へ捨てることとなって、このときは何と神様などにお詫びを申し上げたらという心境にもなったのだ。

さあさあ、急ごうと集合場所へ行ったら、わたしたちの係員はまだ来ていなく、全然違う旅行社の現地係員が、ウロウロして待ち合わせの時間に来ない日本人に困り果てていたようだった。その人は二世だったらしく、

「いやあ、わたしは二世なんです。ここ生まれです。…ずっと、生まれたときからラスベガスですから、来年日本に行ってみようと思っています。日本は、どこから来ましたか」

と、話しかけてきた。それにしても、わたしたちもなかなか現れない係員に不安になり、ひょっとしたら集合場所を間違えたのではと、妻をロビーに残し、フットボール場四個分の広さの、カジノの中を走り、反対側の入口へ行ってみた。結局、そっちにも居ないので、戻ってみると係員が来ていた。

「済みません。遅れて！…エクスカリバーからのお客さんが、待ち合わせの時間に遅れたもので…」

それでも別の旅行社の係員の方は、相当に時間が過ぎているにも関わらず、ウロウロと歩き回っていたようである。その後は、どうなったか知らないが、同じツアーの人が、スリに合いパスポートを取られたという知らせを聞いたのだった。油断すると、こういうことがあるから注意しなければならないのだ。

ラスベガス空港では、現地係員の人がそのパスポートのスリの件で、朝の五時から行動を開始していたらしく、出発の時間が迫っても待ち合いロビーで眠ったままだったので、揺り起こしたのだった。

「はっ！済みません」

と慌てた表情をして、わたしたちを送りだし、わたしたちもラスベガスに別れを告げたのであった。

一番心配なのは、帰りのロサンゼルスへの乗り換えだった。急遽変更された訳だし、結構危険なところでもあるし、と不安との闘いでもあったが、不思議なことに、ロスでは同じツアーでもわたしたちだけのはずなのに、二名同じツアーの客が一緒だった。ベガスからの機内中に、その人たちはわたしたちに不安な表情で問いかけてきたのだ。

「あの一う、済みませんがー、これってロサンゼルス行きですよーね」

「ええ？」

「わたしたちは、サンフランシスコ経由のはずなんですが…」

「ええ！？…どれどれ」

こりゃあ、大変だ飛行機はもう飛んでいるんだぞと、思ったがチケットを見るとロサンゼルス行きとなっているのだ。いったい、どっちが正しいのだ。

一時間程で、ロサンゼルスに着くと、今度は現地係員が待機していた。ここで、先ほどの不安要素を尋ねると、ロスで正解ということだった。しかし、このガイドも変な人で、その二名の女の人たちはタバコを吸うので、帰りの席は喫煙席にで窓側にしてくれということを書いたら、

「窓側ですか、…喫煙席だとなかなか自由には席が決めれないんですがね。それにね。窓側だと、トイレなどに行くときにいちいち、内側に座っている人に立ってもらわなければならないでしょう」

などと、面倒臭そうに言うのである。さらに、しばらくして、

「喫煙席ねえー？窓側だったら窓を開けて、煙を窓の外に全部出せばいいんですよ。…もっとも、窓開けたら貴方がたも、全部吸い込まれちゃいますけどね。ヒヒヒ…」

と一人で笑っているのだった。こんなオヤジがよく係員勤まるよとムムム化しつつ、空港内のを歩いていると、同じツアー客がすべてここに居るのである。結局、わたしたちのツアー会社（小さなツアー会社が共同でやっていたツ

アーなので）だけの変更の連絡を、ちゃんとしてきたということだけの事だったのである。結局は、全員ロス経由だったのだ。

最後のショッピングで入った免税店では、またまた凄い店員が居たのだ。ちょっと太ったオバハンで、客がキャッシュカードを使おうとしたのだが、磁気の部分が故障しているので、手入力でコード番号を入れなくてはならないようだった。

わたしたちの前に、その操作をしてもらっている同じツアーの女の人がいたのだが、番号の入力を間違えているようで、後ろで見ていたその客は、番号違ってますよ、と本当の番号を後ろでゆっくりと読み上げていると、
「ちょっと、あんた余計なこと、言わないで黙っててくれる！また番号間違えるから！」

と、どっちが客か分からないようなことをいうので、その女の人呆れた表情をわたしたちにぶつけてきた。びっくりしたわたしたちは、そのレジを冗談じゃないと言って去り、他のレジに移ったのだった。まったくどいつも！こいつも！

やがて、時間が迫り、かなりすいている日本行きのユナイテッド・エアラインは無事飛び立ち、日本へ向けたのであった。機内には、リチャード・ギア風のパーサーとプロレスの大仁田あつしを細めたようなパーサーが動き回り、最後のドリンクサービスを終えたところで、スチュワーデス共々、

「じゃあー！今夜は日本で、マージャンでもするかハハハ…」

「ハハハ…」

と騒いでいたようである。そして、ラスベガスの怠慢旅行に終止符を打ったのである。

あとがき

怠慢旅行と称されるこのラスベガス物語は、今まで旅行した中でも、一番時間を有効に使い、かつ充実したものとなった。さらに、いつもドタバタハプニングが付きもののわが家の海外旅行であるが、予定通りのハプニングぶりで、行動すれば何かが起きるといったものである。

旅行というものは、適度な刺激が加わるとより一層楽しみが増すというものであるが、適度にして欲しいと願いつつも、そうはさせて貰えないようだ。

さて、人間の記憶というのはコンピューターのように正確に記録されるというシステムを持っておらず、つい忘れちゃいがちである。昨日のことはおろか、ここ一時間前のことすら怪しい半慢性化若年痴呆症みたいなものである。したがって、この旅行記も必死で書き留めて置かなければ、この感動は再びとならないであろう。そのためか、今回は用心し機内およびホテル内には、原稿用紙およびペンを用意して、ひっきりなしに書いていたが、これよりも良い方法として、手帳形式によるメモ書きが良いと分かった。というのも、最初は元気良く書いていけるのであるが、段々と疲れてきて、仕舞には原稿用紙に書く前に片っ端から忘れていったということがあったからだ。

その忘れて書きたかった一つに、ファースト・フード店で食事中にアルバイトの青年が、チャーハンにチャレンジ
していて、それを箸で食べようとしている姿があった。それは、まず右手にてしっかりと真剣に、箸の持ちから確認
し入り、いざ！食べようとしているのだが、パラパラ飯なので、字のごとくパラパラと箸からこぼれ落ち、それでも
ひたすら口に運んでいる様子に耐えかねて、

「それは、日本人でもスプーンで食べるんだよ」

とアドバイスをしたくなった程であったが、こんなことが旅の中ではいろいろな出会いとして人物だけのものに留
まらず情景として、遭遇するのである。

こんな旅が、次回もできれば…いや、ずっと楽しく続けられればと願いつつペンを置いたのであった。

藤永 潤